

2014-2024



一般財団法人オレンジクロス
10周年記念誌



一般財団法人オレンジクロス
10周年記念誌

2014-2024

目次

理事長挨拶	05
一般財団法人オレンジクロス設立 10 周年を迎えて 一般財団法人オレンジクロス 理事長 村上 佑順	05
財団の概要	07
設立の目的	07
事業概要	07
評議員・役員・賛助会員	08
活動内容	09
研究・プロジェクト	09
看護・介護エピソードコンテスト	10
セミナー・シンポジウム	10
広報誌オレンジクロス	11
特別寄稿	13
● オレンジクロスによる現場発明の推進 株式会社ノバケア CEO・一般財団法人オレンジクロス 理事（初代理事長） 岡本 茂雄 氏	13
● オレンジクロス設立 10 周年に際して 東京大学高齢社会総合研究機構・一般財団法人オレンジクロス 理事 辻 哲夫 氏	14
● オレンジクロス 10 年の活動を振り返って 慶應義塾大学大学院 健康マネジメント研究科 教授 堀田 聡子 氏	15
看護・介護エピソードコンテスト	16
看護・介護エピソードコンテスト 10 年を振り返って 変わる時代、変わらぬ思い 看護・介護エピソードコンテスト選考委員長／編集者、ライター 川名 佐貴子 氏	17
看護・介護エピソードコンテスト表彰受賞作品一覧	19
看護・介護エピソードコンテスト表彰受賞事業所を訪ねて	
① 北海道 岩見沢市 ささえる医療研究所	20
② 石川県 小松市 ややのいえ	23
看護・介護エピソードコンテスト大賞受賞者インタビュー	
① 第 1 回大賞受賞者 岡澤 ひとみ さん	25
② 第 2 回大賞受賞者 川手 弓枝 さん	26
③ 第 6・8 回大賞受賞者 中島 圭佑 さん	27

CONTENTS

オレンジクロス この10年のあゆみ	28
2014年度 (2014年7月1日～2015年6月30日)	29
2015年度 (2015年7月1日～2016年6月30日)	30
2016年度 (2016年7月1日～2017年6月30日)	31
2017年度 (2017年7月1日～2018年6月30日)	32
2018年度 (2018年7月1日～2019年6月30日)	33
2019年度 (2019年7月1日～2020年6月30日)	34
2020年度 (2020年7月1日～2021年6月30日)	35
2021年度 (2021年7月1日～2022年6月30日)	36
2022年度 (2022年7月1日～2023年6月30日)	37
2023年度 (2023年7月1日～2024年6月30日)	38

報告書一覧	39
--------------------	----

セミナー・シンポジウム開催実績	41
セミナー	41
シンポジウム	43

編集後記

理事長挨拶



一般財団法人オレンジクロス 理事長

村上 佑順

一般財団法人オレンジクロス 設立10周年を迎えて

一般財団法人オレンジクロスは2014年7月に医療・福祉に関する研究と人材育成及び地域社会の医療・福祉の整備に寄与することを目的に設立し、2024年7月で設立10周年という大きな節目を迎えることができました。これもひとえに、賛助会員の皆様ならびに当財団の各研究・プロジェクトにご参加いただいております皆様のご支援、ご協力の賜物であり深く感謝申し上げます。

財団設立からの10年を振り返りますと、一番に頭によぎることは世界規模で流行しました新型コロナウイルス感染症に関してです。この文章を書いている現在では、新型コロナウイルス感染症は第2類感染症から第5類感染症に移行し、日常の生活を取り戻しつつあります。しかし、新型コロナウイルス感染症発生当初から今までの数年、未知のウイルスのため様々な活動に対して制限が設けられ、当財団としましても皆様にお集まりいただき想いや考えを共有しておりました看護・介護エピソードコンテスト表彰式、シンポジウムを中止するなど財団事業を見直すことになりました。このような環境下の中で医療・看護・介護の現場で活躍されていた方々に関しては、ご自身が罹患できないというプレッシャーや風評被害、クラスターを発生させないために様々な取り組みを行う中で、ご自身の生活を犠牲にし、心身ともに疲弊しながら、患者や利用者、そしてそのご家族の生活を支えてこられたことは、本当に称賛されることだと思います。

今後も未知の感染症が発生することは、歴史から見ても間違いないと予想され、この新型コロナウイルス感染症での経験を如何に次の未知の感染症が発生した際に活かせるように準備するかが、この経験をした我々の役割の1つだと思います。当財団では、現在、「コンパッションに満ちたまち」検討事業という取

り組みの中で、新型コロナウイルス感染症のクラスターが発生した施設のスタッフから聞き取り調査を行っております。当時のスタッフの想いや風評被害への対応などを含め、近いうちに成果として皆様に共有させていただきたいと考えております。

設立当初から実施させていただいております看護・介護エピソードコンテストは、お陰様で回を重ねるごとにご応募していただく方が増え、第10回では205編を超える貴重な看護・介護に関するエピソードをご応募いただきました。今までの全てのエピソードに目を通してありますが、看護・介護エピソードコンテストを開始した当初は大人の方からのご応募がほとんどでしたが、現在は小学生や中学生など若い方からも、ご自身が体験した素晴らしいエピソードをご応募いただき非常に嬉しく思っております。今後も看護・介護エピソードコンテストについては継続していきますので、老若男女問わず多くの皆様にご応募いただき、想いの詰まった素晴らしいエピソードを社会の皆様と共有してまいりたいと思います。

現在、2040年問題が大きく取り沙汰されております。一般財団法人オレンジクロスが20周年を迎える10年後の2034年にはさらに様々な問題が顕在化していると考えられます。岡本茂雄前理事長が掲げられた「自ら研究する財団」という意思を引き継ぎ、今後も国内外問わず先進的な分野や事例について研究・プロジェクトを立ち上げ成果を発表することで、微力ではございますが少しでも社会に貢献できるよう活動をしてまいりたいと思います。引き続きご支援賜りますようお願い申し上げます。

財団の概要

■ 設立の目的

一般財団法人オレンジクロスは、医療・福祉に関する研究と人材育成及び地域社会の医療・福祉の整備に寄与することを目的として設立されました。

■ 事業概要

目的を達成するために以下の事業を実行していきます。

1. 高齢者の医療・福祉に関する調査・研究・研究助成及びその成果を活用したプログラム等の開発・提供並びに人材育成
2. 地域医療・福祉の事業モデルの啓発及び地域医療・福祉に貢献する団体・個人の表彰
具体的には、2024年6月現在、以下の研究開発・啓発事業に取り組んでいます

研究開発

- 統合ケアマネジメント事例検討会
- 認知症のある人との心理的対等性実現のためのXR技術を活用したPX体験学習システムの開発と実証評価研究
- 日本版「社会的処方」のあり方検討事業（仮題）
- 「コンパッションに満ちたまち」検討事業

啓発

- 看護・介護エピソードコンテストの実施
- セミナー、シンポジウムの開催
- 広報誌「オレンジクロス」の発行

評議員・役員・賛助会員

■ 評議員・役員

評議員	村上 美晴	一般財団法人オレンジクロス創業者／ セントケア・ホールディング株式会社 代表取締役会長
	伊藤 伸一	社会医療法人大雄会 理事長
	亀口 政史	亀口公認会計士事務所 所長 公認会計士
	鳥飼 重和	鳥飼総合法律事務所 代表弁護士
	西村 周三	京都先端科学大学 経済経営学部 教授／医療経済研究機構 特別相談役
	日野 正晴	日野正晴法律事務所 弁護士
理事	村上 佑順	一般財団法人オレンジクロス代表理事
	岡本 茂雄	国立研究開発法人 産業技術総合研究所 招聘研究員
	田中 滋	埼玉県立大学 理事長／慶應義塾大学 名誉教授
	辻 哲夫	東京大学 高齢社会総合研究機構／未来ビジョン研究センター 客員研究員
	平尾 雅司	株式会社シード・プランニング 執行役員
	比留川 博久	国立研究開発法人産業技術総合研究所 名誉リサーチャー／ 九州工業大学 特命教授／株式会社ノバケア 取締役
監事	中田 ちず子	中田公認会計士事務所 代表
	横井 裕之	医療法人財団 三友会 ネットワーク事業課 部長

■ 賛助会員

賛助会員	株式会社コスモスケアサービス
	社会福祉法人新生会
	株式会社ツクイ
	株式会社デベロ
	日本生活協同組合連合会
	株式会社やさしい手

※ 50音順・2024年4月1日現在

活動内容

研究・プロジェクト

設立以来、地域包括ケアのさらなる発展を目指し、さまざまな研究に取り組んでいます。

「ソーシャル・コミュニティ・ナーシング (SCN) 機能」の研究

※ 2019年度

SCN 機能の定義を検討し、活動内容・技法に基づき、機能の類型化を行い地域のケアニーズと SCN の類型との関連を探索的に研究

「家庭医療・老年医療のあり方」の研究

※ 2019年度

生活の場である地域で、サービスが統合的に機能する基準を策定することを目指す (医師・看護師のギャップについて検討)

統合ケアマネジメント事例検討会

各専門職がフラットな関係性の中で事例を検討する会。財団ホームページに定期的に検討結果を掲載

地域包括ケアステーション実証開発プロジェクト

※ 2017年度

地域包括ケアに関わる国内各地の参加主体をパイロットステーションとし、多主体多職種協働ケアチームの在り方を研究することを目的とした実証プロジェクト

住民本位の地域包括ケアのマネジメントに関する連続勉強会

※ 2017年度

住民本位の地域包括ケアシステム構築に向け、事業マネジメントに焦点をおいた勉強会

人工知能学に基づく「認知症見立て知」の共学・共創システムの開発と実証評価研究

人工知能による学習評価等により、専門職や地域の人々の認知症の見立て能力を向上することを目的とした研究

日本版「社会的処方」のあり方検討事業

※ 2023年度

社会的処方を手がかりに、「住民本位の地域包括ケア、地域共生社会の実現」に向けて検討・検証するプロジェクト

「コンパッションに満ちたまち」検討事業

「死にゆくこと (dying)」「死 (death)」「喪失 (loss)」の普遍性に焦点をあて、コミュニティのあらゆる場で「生老病死を地域住民の手に取り戻す」実践的研究を目指す

認知症のある人との心理的対等性実現のためのXR技術を活用したPX体験学習システムの開発と実証評価研究

本研究ではケア従事者の支援力向上を目的に、PX (Patient eXperience) をメタバース空間において擬似的に体験するための学習システムを開発し、その効果を検証

■ 看護・介護エピソードコンテスト

看護・介護職の素晴らしさをさらに広く知っていただきたいとの思いから、財団設立当初の2014年より「看護・介護エピソードコンテスト」を実施しており、多くの作品をご応募いただいています。



- 表彰作品一覧 P19
- 大賞・特別賞受賞者のインタビュー（一部） P20 ▶▶ P27

■ セミナー・シンポジウム

地域包括ケアに携わる方々のお役に立てるよう、多彩な専門家をお招きしてさまざまなセミナーやシンポジウムを開催。オンラインで公開することに加え、各種資料は財団のホームページにアップしています。



- セミナー・シンポジウムの開催実績 P29 ▶▶ P38
- ※一覧は P41 ▶▶ P44

活動内容

広報誌オレンジクロス

2016年から、当財団の取り組みに加え、地域包括ケアシステムを実践する各種法人への取材記事やセミナーの要約、看護・介護エピソードコンテストの表彰式の模様などを紹介した冊子を発行しています。年2回のペースで発行・配布しています。



バックナンバーはHPで公開しています

VOL.01(創刊号) | 2016 夏号

- 理事長挨拶…
オレンジクロス理事長 村上 佑順
- 財団の活動・財団の概要・役員構成
- 創刊インタビュー…
東京大学高齢社会総合研究機構
特任教授 辻 哲夫氏/
オレンジクロス前理事長 岡本 茂雄
ほか



VOL.02 | 2017 春号

- 巻頭言…オレンジクロス理事 田中 滋
- 第2回 オレンジクロスシンポジウム
第1部 エピソードコンテスト表彰式
第2部 講演会
国立研究開発法人産業技術総合研究所
ロボットイノベーション研究センター
研究センター長 比留川 博久氏
ほか



VOL.03 | 2017 夏号

- 巻頭言…
オレンジクロス評議員 日野 正晴
- 財団の概要・役員構成・財団の活動
- 地域包括ケアの取り組みインタビュー…
東京トータルライフクリニック
馬淵 茂樹さん、藤 純一郎さん、
江川 恵子さん(台東区)
ほか



VOL.04 | 2018 春号

- 巻頭言…風の旅人編集長/
オレンジクロス理事 佐伯 剛
- 第3回 オレンジクロスシンポジウム
第1部 エピソードコンテスト表彰式
第2部 特別講演 株式会社ケアーズ
(白十字訪問看護ステーション) /
暮らしの保健室室長/マギーズ東京センター長
秋山 正子氏 ほか



VOL.05 | 2018 夏号

- 巻頭言…一般財団法人医療経済研究・
社会保険福祉協会 医療経済研究機構
所長/オレンジクロス評議員
西村 周三
- 地域包括ケアの取り組みインタビュー…
NPO 法人たんがく 理事長 樋口 千恵子さん
- 第4回看護・介護エピソードコンテスト選考結果
ほか



VOL.06 | 2019 春号

- 巻頭言…川島法律事務所 弁護士/
オレンジクロス理事 川島 英明
- 第4回 看護・介護エピソードコンテスト…
表彰式 受賞者スピーチ
- オレンジクロスセミナー
第2回 AIによる高齢者の自立促進・重症化予防…
岡本 茂雄氏(株式会社シーディーアイ代表取締役社長)
第3回 米国の在宅ケアと先端技術…
西村 由美子氏(メディカルジャーナリスト) ほか



VOL.07 | 2019 夏号

- 巻頭言…国立研究開発法人産業技術総合
研究所 ロボットイノベーション研究
センター長/オレンジクロス理事
比留川博久
- 地域包括ケアの取り組みインタビュー…
株式会社まちなす(千葉県八千代市)
- 第5回 看護・介護エピソードコンテスト 選考結果、大賞作品
ほか



VOL.08 | 2020 春号

- 巻頭言…鳥飼総合法律事務所 代表弁護士/
オレンジクロス評議員 鳥飼重和氏
- 第5回 看護・介護エピソードコンテスト…
表彰式 受賞者スピーチ
- 第5回 オレンジクロスシンポジウム
医療だけで健康は創れるのか -「社会的処方」の活動を
手がかりに、生老病死を住民の手に取り戻そう- ほか



VOL.09 | 2020 夏号

- 巻頭言…オレンジクロス事務局長
西山 千秋
- 第6回 看護・介護エピソードコンテスト…
選考結果、受賞作品、受賞者の言葉、講評
- 地域包括ケアの取組み…
新型コロナに想う～メッセンジャーナーズの挑戦～
在宅看護研究センター LLP 代表 村松 静子さん
ほか



VOL.10 | 2021 春号

- 巻頭言…亀口公認会計士事務所 所長
公認会計士／オレンジクロス評議員
亀口 政史氏
- 特別寄稿…雰囲気、気持ちの自立度改善
への影響 国立研究開発法人 産業技術
総合研究所 招聘研究員／オレンジクロス 理事
岡本 茂雄氏
- 米国の最新情報…米国の医療界に広がる患者エクスペ
リエンスという新しい動き Caring Accent (ケアリング・
アクセント) 主宰／ PhD, CPXP (Certified Patient
Experience Professional : 米国) 近本 洋介氏 ほか



VOL.11 | 2021 夏号

- 巻頭言…セントケア・ホールディング
株式会社 執行役員 品質企画本部 地域
包括ケア推進室長／オレンジクロス理事
平尾 雅司氏
- 第7回 看護・介護エピソードコンテスト…
選考結果、受賞作品、受賞者の言葉、講評
- 特別寄稿…生活困窮者の健康支援の考え方～エビ
デンスとナラティブをもとに～ 大阪医科薬科大学
研究支援センター医療統計室 助教／南丹市国民健康
保険美山林健センター診療所 所長 西岡 大輔氏 ほか



VOL.12 | 2022 春号

- 巻頭言…社会医療法人大雄会 理事長／
オレンジクロス評議員 伊藤 伸一氏
- 特別寄稿…パンデミック下の地域医療の
現場で考えてきたこと 医療福祉生協
連合会家庭医療学開発センター
センター長／生協浮間診療所 医師 藤沼 康樹氏
- 財団レポート…認知症見立て塾の実践で見えてきた
オンライン学習の仕掛けとデータ化
静岡大学 助教 石川 翔吾氏 ほか



VOL.13 | 2022 夏号

- 巻頭言…中田公認会計士事務所／
株式会社 中田ビジネスコンサルティング
公認会計士・税理士／オレンジクロス監事
中田 ちず子氏
- 第8回 看護・介護エピソードコンテスト…
選考結果、受賞作品、受賞者の言葉、講評
- オレンジクロスセミナー…第1回 米国流ニュー・ノーマル
ポスト・コロナの暮らし・健康・医療・介護
メディカルジャーナリスト 西村 由美子氏
ほか



VOL.14 | 2023 春号

- 巻頭言…株式会社福祉の里 代表取締役／
前 オレンジクロス監事 矢吹 華絵氏
- 現地レポート…わたしの社会的処方との
出会いと三重県での拡がり 理学療法士／
みえ社会的処方研究所 代表 水谷 祐哉氏
- 特別寄稿
ほか



VOL.15 | 2023 夏号

- 巻頭言…医療法人財団 三友会 部長／
オレンジクロス監事 横井 裕之氏
- 第9回 看護・介護エピソードコンテスト…
選考結果、受賞作品、受賞者の言葉、講評
- オレンジクロスセミナー…
2023年第1回 経験の拡張によるケア教育 DX の可能性
静岡大学・講師 石川 翔吾氏／
山梨大学・特任教授 小林 美亜氏
ほか



VOL.16 | 2024 春号

- 巻頭言…株式会社ノバケア
代表取締役社長／オレンジクロス理事
岡本 茂雄氏
- 現地レポート…一般社団法人
TeamNorishiro 理事 西村 俊昭氏
- 特別寄稿
- 財団レポート
ほか



※肩書きは広報誌掲載当時のものです。



オレンジクロスによる現場発明の推進

株式会社ノバケア CEO
一般財団法人オレンジクロス 理事（初代理事長）
岡本 茂雄 氏

初代理事長を務めました岡本です。介護分野で仕事を進める者として、介護分野にこそ研究とそれによる進化が必要と考えていました。しかし、医療や看護分野の研究機関はあるものの、介護については大学に学科すら存在しない状況でした。また、介護分野の進化のためには、技術開発だけでなく現場での活用方法も重要と考えていました。そこに、セントケアHDの村上会長から介護分野での財団設立の話があり「渡りに船」、介護分野での先端技術による発明と、その活用方法までを自らが考える財団を提案しました。このような研究者はまだまだ少なく、おこがましいですが事業化を前提とした発明を行ってきた自分も、理事長ではあってもマネジメントのみではなく、発明や現場での活用にまで参加する組織としました。

このパラダイムの下、介護分野に多大な貢献をされてきた現埼玉県立大学理事長の田中滋先生、元京都大学副学長の西村周三先生、元厚生労働省事務次官の辻哲夫先生などにご相談、ご協力をいただくことになりました。西村先生とオランダの最先端の訪問看護Buurtzorgの日本適用を考えた実践研究会、田中滋先生と地域看護機能を考える研究会などをスタートさせました。現場の意見を聞き、現場で役立つ発明を行うため、全国の地域包括ケアの現場や、さらにオランダの訪問看護の現場にまで出向きました。さらに、現場での活用・工夫こそが大事であるとのパラダイムを社会に広めることが重要として、小さな財団ではありますが設立パーティに、研究者の方々、地域包括ケアの実践者、行政者などにお出でいただきました。設立パーティには、現内閣官房長官である林芳正先生にもお出でいただき、その後もデジタルヘルスやAI分野に深い理解をいただくことになりました。その後、科学的介護情報システム「LIFE」がスタートするなど、介護現場での介護の進化を促す制度やインフラの整備がどんどん進んでいます。

理事長をおりた自分も、このパラダイムを胸にノバケアと言う会社を設立、現場を進化させるAIとAIを活用した業務プロセスをセットで開発しています。すでに、介護リハビリAIを完成、進化型の訪問看護AIの開発にもかかっています。さらに、オレンジクロス立ち上げに多大なご協力いただいた辻先生の下、フレイル予防を実現するAIを開発するとともに、フレイル予防自体を国民の文化とするため、国民運動化を目指した活動をも開始しております。

現場で役立つ発明を行うこと、現場自体を進化させる発明とすること、このパラダイムの下、自らも発明をする財団として、オレンジクロスがさらなる進化をされることを期待します。



オレンジクロス設立10周年に際して

東京大学高齢社会総合研究機構
一般財団法人オレンジクロス 理事
辻 哲夫 氏

オレンジクロスと私との関わりの始まりは、創始者の村上美晴さんとの30数年前の出会いにあります。

当時私は厚生省で民間福祉サービス分野の健全な振興という業務を担当するシルバーサービス振興指導室長に就いており、その最初の仕事相手が訪問入浴サービスの業界の代表の方々でした。その皆様方は、寝たきり高齢者が在宅で入浴された時の笑顔を喜びとして頑張ってこられた民間在宅福祉サービスの開拓者であり、その後大きく発展した在宅介護サービス業界のリーダーとして目覚ましい活躍をされました。村上さんはその中で最も若い経営者として現在のセントケアグループをお育てになったのです。そして、かねてより、福祉に関わる仕事を^{なりわい}生業としてきた者としてこの分野に恩返しをしたいという思いを持たれ、長い付き合いの私にご相談があり、及ばずながら財団の立ち上げの時からお手伝いさせていただいてきました。

財団設立以来、オレンジクロスは、各界の代表的な研究者が関わる中で、総合的な視点に立ったケアマネジメントの事例検討という現場密着型の研究を持続しつつ常に内外の最新の動きを捉えるという考え方を基本に、ソーシャル・コミュニティ・ナーシング機能、社会的処方、人工知能学を通じた認知症への対応といった最前線の研究テーマに取り組むとともに、看護・介護エピソードコンテストを始め大変中身の濃い各種セミナー、シンポジウムなどしっかりと社会への発信をし、日本の地域医療・福祉分野の質的な前進に貢献してこられました。組織面では初代理事長の岡本さんが大手企業グループ出身のこの分野のベテラン人材である西山さんを事務局に迎え入れるなどの基礎固めをし、そのバトンを受け継いだ村上佑順現理事長が強力かつ丁寧に質の高い財団活動を展開され、創始者の思いを見事に具現化され現在に至っていることに深い敬意の念を表します。

日本は今、人口減少が進む中で、高齢化の正念場ともいえるべき2040年への急坂に向き合っています。これまでの延長線上の手法だけでは乗り越えられないと思います。医療・福祉を通ずる質の高い包括的なケアの推進のための不断の研究と果敢な取り組みが不可欠です。

オレンジクロスがその志を堅持し一層の活躍をされますよう、心より祈念いたします。



オレンジクロス10年の活動を振り返って

慶應義塾大学大学院 健康マネジメント研究科 教授

堀田 聰子 氏

大学時代の恩師である西村周三先生にお供して、法人設立者の村上美晴氏にご挨拶させていただいて以来、地域包括ケアステーション実証開発プロジェクト（2014年～2016年）、住民本位の地域包括ケアのマネジメントに関する連続勉強会（2017年度）、日本版「社会的処方」のあり方検討事業（2018年度～2023年度）、「コンパッションに満ちたまち」検討事業（2021年度～）と、継続的に研究・プロジェクトの推進、関連する公開シンポジウムの企画等に携わる機会を与えていただきました。心よりの感謝とともに、10周年をお祝い申し上げます。

地域包括ケアシステムの構築には、利用者等に対するケアとそのマネジメント、事業所・法人及び地域経営の視点からのマネジメント、これらを支える制度や報酬・基準等の政策という3つの層でのたゆまぬ進化が求められます。

オレンジクロスの一連のプロジェクトは、現場での問いを起点に、医療介護福祉関係の専門職・事業者、関係団体、地域住民、国や地方自治体、研究者らが、立場を超え、地域や国を越えて、この3つの層を往来しながら、学び合い、実践と対話を重ねる貴重な場となってきました。

その出発点である地域包括ケアステーション実証開発プロジェクトでは、全国各地から参画した38の多主体多職種協働ケアチームが、オランダの在宅ケア組織・ビュートゾルフのナレッジを共有し、年齢や疾患・障害の別を問わず、生涯を通じて看護・介護・予防・リハビリ・ケアマネジメント・医療機能を組み合わせ、住民本位の統合ケアを目指しました。振り返ってみれば、利用者・患者の尊厳の保持、自立生活の支援を手がかりに「すべての住民」が、「よりよい生活のなかでの経験」を「ともに創り出して」いけるケアと地域づくりの小さなムーブメントともいえ、これは、いまや国の孤独・孤立対策においても注目を集めるようになった社会的処方の3つの基本理念である人間中心性・エンパワメント・共創にも重なっています。同プロジェクトは、理念をともにする主体が出会い、イノベーションを創発するゆるやかなプラットフォームにもなり、例えば2021年には参加したメンバーらが、訪問看護の周辺業務を看護師目線で最適化する一般社団法人 Vehicle for Nurses を設立しています。

10年間の事業を通じて得られた知見とさまざまつながり・場を活かし、地域包括ケアシステムの構築と地域共生社会の実現に向けたさらなる貢献に、期待しています。

看護・介護 エピソードコンテスト

オレンジクロスでは、看護・介護を通じたエピソードを広く募集し、看護・介護職の素晴らしさをさらに広く知っていただきたいとの思いから、財団設立当初の2014年度より「看護・介護エピソードコンテスト」を開催しています。看護・介護にかかわる方々を応援するため、大賞に賞金30万円・優秀賞に賞金10万円・選考委員特別賞に5万円、理事長賞3万円（2022年度新設）が贈呈されるなど、積極的に応募していただけるような仕組みも整えた結果、応募数は年々増え、近年は200を超える作品が集まるなど、着実に社会に認知されつつあります。応募者も、看護職・介護職のみならず、一般の方、医師・福祉職など多分野にわたっています。

看護・介護エピソードコンテスト10年を振り返って

変わる時代、変わらぬ思い

看護・介護エピソードコンテスト選考委員長／編集者、ライター
川名 佐貴子 氏



10周年おめでとうございます。コンテストの選考委員は、秋山正子さん（暮らしの保健室室長、認定NPO法人マギーズ東京センター長）、溝尾朗さん（患者目線のクリニック 虎ノ門内科・皮膚科院長）と私の3人で、この10年続けてまいりました。毎回、意見を活発に交わし、選考を楽しんでいます。財団の10周年にあたり、第1回目から年代を追って作品の一部をピックアップしてみましたので、この世界をお楽しみください。

スタートした当初は、過去を振り返る作品も多くありました。訪問看護ステーションは、現在では当たり前の社会資源ですが、1992年に誕生した時は、病院を飛び出し強い決意をもって飛び込むチャレンジングな分野でした（①）。認知症がまだ痴呆と言われていた時代にさまざまな試行錯誤があり（②）、馴染みの関係性を重視するグループホームやユニットケアという手法が開発されていったことは忘れてはいけない歴史です。

2000年に介護保険制度が創設され、在宅サービスが全国で整備されるようになり、これまで家族だけで担うものだった介護が、プロの手を借りるものへと大きく姿を変えました（⑥）。2023年の第9回ではひとり暮らしでヘルパーや看護師らに支えられ、自宅で亡くなられたエピソードがあり、我が国の地域包括ケアもついにここまで来たかと感動いたしました（⑨）。

2011年の3.11東日本大震災以降は、台風や地震などによる大規模災害が頻発（③）。そして、2020年4月の緊急事態宣言から3年間のコロナ禍。危機に直面した現場をどう支え、乗り切ってきたかは広く知ってほしいテーマです（⑦）。

応募作品には時代が反映される一方、普遍性のあるテーマも多々あります。学生時代の実習経験、看取りの後の喪失感と成長、家族の愛憎などなどです（④・⑤・⑧）。英語のケアの原義は、鳴き声、悲しみの声であり、そこから「気がかり」「心配」「世話」という意味が生じたそうです。

そう考えると、失語症になった老いた妻の言葉にならない声に懸命に耳を傾ける夫の姿（⑩）こそケアそのものと言えるのでしょうか。本人への思いはケア職よりも家族に分があり、胸をうつ作品が少なくありません。

今回の企画では、過去の受賞者へインタビューをいたしました（P20～27）。優れたエピソードに共通するのは対象者の方と一対一、人として向き合う姿です。それぞれ数十年にわたり介護・看護を進化させてきた原動力ではないでしょうか。言い換えると、優れたエピソードがあるところに、優れたケアありといえます。

第6・8回の二度の大賞を受賞した中島圭佑さんは、文章も上手ですが、エピソードを引き寄せる介護名人です。彼が取り組んでいるような人生の最後が一人きりであっても、楽しかった、長生きしていて良かったと思わせてくれる介護が、広がってほしいと心から願います。文章にまとめることは、頭と心の整理になり、作品として公表することで、誰かの目にとまり、人生を変える力があることも受賞者の取材を通して知りました。文章は二の次で、メッセージ性や作品の魅力重視ですので、文章が苦手という方でも入賞のチャンスはあります。ぜひ、チャレンジしてください。

さて、介護・医療政策はポスト2025年に向けて動き出しました。団塊の世代は75歳を超えていき、介護や看取りのニーズは増える一方で、人口減少により担い手不足が顕在化。老老介護やお一人様での旅立ちが日常となるそんな時代を、ICTやAIといった技術を駆使し、外国人の力を借りながら、進化・深化を続け、力強く乗り切っていく姿が私には見えます。エピソードは個人の物語ですが、時代の証言として貴重です。

このエピソードコンテストが、介護・看護現場の本当の魅力や、仕事としてのやりがいを内側から発信する機会として、また私達の生活を映す鏡として、今後ますます発展していくことを期待しております。

※文中○番号は右ページの「各回抜粋エピソード概要」の番号です

▶ 各回抜粋エピソード概要 ※受賞作品はオレンジクロスホームページで公開しています。

第1回 優秀賞

①『私に気づかせてくれた訪問看護』鈴木 ひとみさん

限られた少ない物の中で考え、代用し、病院では考えられないような方法で療養生活をしていく事ばかりである。それでもやはり自宅で過ごす顔は、家にいる安心感や気兼ねの無い雰囲気がある。私たちを出迎える喜びもあり、私たちもそれを感じ、嬉しくなる。もっと良くしていこうと思える。そうやって信頼関係が生まれていって、他人じゃなくなる。

(病院を退職し、訪問看護を始めたころの思い)

第2回 優秀賞

②『今も心に誓った介護』大澤 憲夫さん

その部屋は特別室でした。どうして特別室なのかは、認知症状が重い人の部屋だからです。ベッドは転落の恐れがあるため撤去され、床は畳敷きで、失禁や便弄りで汚れないようにビニール製の蓑で覆っていました。また部屋の壁は誤って頭を打たないように、クッション入りの特殊加工されたものが腰の高さまで施工されており、衣類用ロッカーとトイレ以外は何もない部屋でした。

(34年前、特別扱いされていた認知症介護の現場で、高齢者の人柄に触れた)

第3回 優秀賞

③『熊本地震が残したもの』谷富 明子さん

「あなたには、たいが世話になったばい。あなたのおかげで、“100まで生きよう”て思うようになった。私も頑張るけん、あなたも頑張んなって。あなたは話ば聞くとの上手かもんな。今の仕事ば続けなせ」。自分で作った白菜の漬物を手渡し、私の腰を叩きながら、Oさんは笑いながら言った。そして、長男家族と一緒に避難所を後にした。

(ケアマネジャーとして被災者支援にあたった時の出会い)

第4回 大賞

④『もう一人のおばあちゃん』小山 祐加さん

『Oさん、私にも“あの子は一人やから寂しい思いしてるやろなあ”っていつも言ってたよ。きっとあなたの事、ほんまの孫みたいで可愛かったんやろなあ・・・』と涙しながら話してくれました。私はOさんとお別れがきっかけで、利用者さんの異変にいち早く気付ける様になりたい、医療の知識を身に付けたいと強く思う様になり、数年後、介護士から看護師になりました。(中略)『利用者さんを家族だと思い常に関わる』と云う事の大切さを教えてもらいました。

(可愛がってくれた高齢者との突然の別れを乗り越えて)

第5回 大賞

⑤『最後の時間』森川 詩歌さん

家族の形や事情はそれぞれだ。すれ違いを続け、わだかまりが大きくなり、疎遠になったり憎しみ合ったりしている家族もあるだろう。元気なうちにわかり合えたなら、それ以上の幸せはない。だが、もしそうでないとしたら、そのしこりを取り除く最後のチャンスは、人生の旅を終えようとしている家族に寄り添い、手を握り、看取ることかもしれない。

(嫌いだっただ祖父に嫁として尽くした母の姿を見て)

第6回 優秀賞

⑥『ONE TEAM』佐々木 良子さん

今は軽い認知症もあるが、一人で頑張って生活している。もちろん、ヘルパーさんの助けを借りながら、私たち家族総出で支えている。私自身、たくさんの人に支えられながら生きてきた。毒舌を吐いていた母だって歳は取る。人は一人では生きていけない。大なり小なり支えあって生きているのだ。介護に大切なのは「ONE TEAM」。家族、地域、社会が一つになってこそ乗り越えられる。

(事故で全身麻痺かつシングルマザー、母親の介護にチームで向き合う)

第7回 大賞

⑦『「つなぐ」を強く、笑顔のために』小松崎 潤さん

なんとか家族に会わせたい。その一心で私はオンライン面会の企画を会議で通した。「ユキコ!!」久しぶりの『再会』に喜びを爆発させたミエさん。一方娘さんも「母ちゃん!もうそんなに痩せて!しっかり食べてるの?」と声を詰まらせた。(中略)やっぱり、互いが、命綱なんだ。(中略)まだまだ終わりの見えないコロナ禍。だけど私の挑戦も終わらない。ゴールは想いをつなぐことじゃない。その先にある笑顔だ。

(コロナ禍で面会禁止でも家族となんとかつなごうと試みた)

第8回 優秀賞

⑧『「生きる」ことと、私の誓い』栗原 佑果さん

若いのに、子供も小さいのに。どうしてこんなことが起こらなくてはいけないのだろう。いいことをしていても病気になる人はいるし、悪いことをしていても病気になる人はいる。因果応報とか、日々の行いとかが、そういうこととは全く関係なく、ひとは病気になる。治るひともいれば、治らないひともいる。なんて理不尽だ。

(大学1年時の実習で、生きている患者さんに寄り添う看護師になりたいと思った)

第9回 優秀賞

⑨『在宅ターミナルケアを選択して』井上 文子さん

大工だった父が50数年前に自分で建てた家で、愛してやまなかった初孫に「大好きだよ」と手を握られながら、旅立って父にとっては幸いだったと思うし、私たち家族にとっても救いとなった。コロナの渦中も毎日父を支えてくれた介護ヘルパーさんたちや医療関係者の皆様にも心から感謝を伝えたい。

(遠方に住む家族と看護師、ヘルパーが協力し、本人の願いをかなえた)

第9回 選考委員特別賞

⑩『だから私は頑張れる』中村 正弘さん

あしたもきっと「これ、これ」に始まる。「これ」に続く言葉のない妻の意志を理解するのは難しい。だがなんとかがかってやりたい。妻の頭の奥にあって、しかし決して口からは出てこない言葉。「これ、これ」とか「こう、こう」の裏にあるその言葉を少しずつではあるが推し量ることができるようになってきた。私とその言葉をいい当てた時の妻の顔は、ほんとうにうれしそうで、私の心まで満たしてくれる。だから私は頑張れる。

(80代老老介護が始まって)

▶ 看護・介護エピソードコンテスト表彰受賞作品一覧

※表彰作品はオレンジクロスホームページで公開しています。

	年度	応募期間	応募総数	受賞作品・作者					理事長賞 (入賞編数)
				大賞	優秀賞	優秀賞	優秀賞	優秀賞	
第1回	2014	2014年10月～2015年1月	12	幸せな時間 岡澤 ひとみさん	私に気づかせてくれた訪問看護 鈴木 ひとみさん	幸さんのメッセージ 筒井 英子さん	忘れられない介護エピソード 本田 涼子さん	—	—
第2回	2015	2016年3～4月	36	地域のつながりが生んだ支援 “絆の連絡帳” —在宅介護ケアスタッフの連携— 川手 弓枝さん	今も心に誓った介護 大澤 憲夫さん	そばにいてくれたらいいから 稲葉 典子さん	かざぐるま 三島 裕子さん	きみえさんちものがたり 三上 薫さん	—
第3回	2016	2017年2～4月	30	ほがらかに楽しくおらせてくれやの 松村 朋枝さん	心の耳・・・心のリズム 新美 寿栄さん	熊本地震が残したものの 谷富 明子さん	地域の一員として物申すばい! ～ホームホスピスが我が家になった三婆物語～ 樋口 千恵子さん	むらかみさんでささえたい 山崎 緋沙子さん	—
第4回	2017	2018年2～5月	132	もう一人のおばあちゃん 小山 祐加さん	「帰りたい場所」へのお手伝い 岩田 舞祐さん	やさしさの記憶 二宮 佐智子さん	芳子さんが教えてくれたこと 長谷 直樹さん	最期の宇宙飛行 林 侑太郎さん	—
第5回	2018	2019年2～5月	107	最後の時間 森川 詩歌さん	私らしく、私だからできること 小松崎 有美さん	「対話する」ということ そこから見える本当の願い 古澤 奈都美さん	大切な「おはぎ」 細名 優花さん	傾聴ちょボラ 渡辺 勇三さん	—
第6回	2019	2020年2～5月	145	この世界は儂い、だから美しい 中島 圭佑さん	ONE TEAM 佐々木 良子さん	諦めなくて良かった JONI PALSONさん	ああいいう人になりいさん 杉山 和香子さん	おばあちゃんありがとう 飛川 希さん	—
第7回	2020	2021年2～5月	132	「つなぐ」を強く、笑顔のために 小松崎 潤さん	この道はいつか来た道 土岐 ことはさん	届け! 最後まで最高のピース 中山 恵美代さん	旅立ちの時に、私の勤務を選んできた 蛭田 えみさん	ダブルケアの極意 見澤 富子さん	—
第8回	2021	2022年2～5月	105	体温が伝わる手紙～あなたが残した愛のかたち～ 中島 圭佑さん	祖母の応援団 犬塚 千尋さん	「生きる」とこと、私の誓い 栗原 佑果さん	トイレが世界を変える!? 田中 良樹さん	一握りの罪悪感 奥谷 富美子さん	—
第9回	2022	2023年2～5月	260	偶然とコトバ 脇本 優佳さん	在宅ターミナルケアを選択して 井上 文子さん	奇跡をおこす、豊かな笑顔。 河村 一孝さん	虹のほほえみ 吉沢 慎一さん	リハパンを履いてみたら 沖田 千絵子さん	25編
第10回	2023	2023年12月～2024年3月	205	母と紡ぐ心の絵本 天竹 勉さん	トウ・ノート ブックス・フル・オブ・ヘルプ 尾崎 紀子さん	アトピーの集団介護 木俣 肇さん	優しいうそーパスの来ないバス停 武田 誠さん	愛のかたち～幸せな人生のために 小松崎 有美さん	25編
								ありがとう 中田 汐俐さん	
								だから私は頑張れる 中村 正弘さん	
								猛吹雪をゆく訪問入浴 村山 祐太さん	
								同性介護 大西 賢さん	
								かっこいい背中 酒井 ニコさん	
								ほんとうのきもち 未弘 千恵さん	
								気持ちを伝えるということ 杉山 ひかりさん	
								救われたのは私だった 前田 幸子さん	

※オレンジクロスの事業年度は7月～翌年6月です。

看護・介護エピソードコンテスト
表彰受賞事業所を訪ねて ①

北海道 岩見沢市 ささえる医療研究所

主役はまちのおばちゃん、お姉ちゃん エピソードを紡ぎ続ける

「半径5mのハッピー」

夕張市の医療再生プロジェクト（下コラム参照）の陣頭指揮をとった医師の村上智彦さんが立ち上げた「医療法人社団ささえる医療研究所」（北海道岩見沢市）からは2つの作品が入賞している。村上さんは残念ながら2017年に亡くなったが、その理念は今も継承されており、地元に着用を持って働く人の成長を支えることを通じ、「半径5mのハッピー」を創り出すまちづくりを今も着々と進めていた。



医療法人社団ささえる
医療研究所理事長・
ささえるクリニック岩見沢
院長

永森 克志さん

— 2016年の第2回「きみえさんちものがたり」（三上薫さん）、2017年の第3回で「むらかみさんでささえたい」（山崎緋沙子さん）の2作品が、選考委員特別賞を受賞しました。

我々法人の理念は、医療・看護・介護を通じてコミュニティを守ること。住み慣れた町、地域で、死ぬまでハッピーに暮らすことをささえることです。さらに、雇用を生み出すことで、まちづくりに貢献し、地域社会を維持しつづけることを目指しています。ですので、どちらの作品も僕たちのキーストーリーであり、原点です。

「きみえさんちものがたり」は、夕張出身で定期巡回随時対応型訪問介護を始めたときの話で、書いたのは夕張出身の三上さん。当時はヘルパーでしたが、今は岩見沢でケアマネジャーとして働いています。「むらかみさんでささえたい」は、旭川市神楽岡出身の山崎さんが、地元で訪問看護ステーションを立ち上げた時の話で、彼女は今も訪問看護ステーションの所長を続けています。

「地元に着用と覚悟をもった住民が担う地域医療が最強

である」、と村上さんは考えていて、亡くなった後もその強い思いをここで受け継いでいます。

地方には人材がいない。学歴も資格もない人を自分たちで育てるしかない。これは、夕張の医療再生プロジェクトで学んだことです。僕は佐久総合病院（長野県）で3年間の研修を受けた後、大学で皮膚科の専門医になり、美容整形をやるかとも考えていましたが、村上さんと出会い意気投合して、家族とこっちに移住してきました。昔みたいに「赤ひげ先生」だけの頑張りやで医療を守るのではなくて、医師がキャリアの途中で気軽に来られる環境を築いていけばいいのではないかと思ひ、ともに汗を流そうと決めました。僕自身も、北海道の美しい自然の中で仕事がしたいという思いがありましたから。

— 夕張でやってきたことが行政ぐるみのトップダウン型のまちづくりとすると、ここでやっているのは、ボトムアップ型のまちづくりといえますね。

だから大事なことは人材育成で、ここでは「主役はまちのおばちゃん、お姉ちゃん」。学歴はないけれど、勉強の



永森さんと、「ジムッコ」と呼ばれるスタッフたち。

夕張市の医療再生プロジェクト

地域医療・予防医療のエキスパートである村上智彦医師が進めていたプロジェクト。市立総合病院（117床）を有床診療所（19床）に縮小し、老人保健施設に転換、在宅医療を行う再建策は地域包括ケアシステムの先駆けと全国的にも注目された。村上氏は借金して法人を作り、公設民営で運営にあたった。2017年に病没。著書に「最強の地域医療」（KKベストセラーズ）。



「ともの家」にある、村上さんのメモリアルコーナー。

機会を設けると頭が良くてどんどん吸収していくので、あえてそういう言い方をしています。採用は学歴や職歴よりも、地元への愛着や互いに譲り合い助け合う「互譲互助」精神を重視しています。助け合い精神でワークシェアをしているので休みが取りやすく、働きながら学びやすい環境にあると思います。学びを促すために、「寺子屋」と称する勉強会をしていて、職員も子ども連れで来て楽しくやっています。最近ではみんなでタイピング検定に挑戦していました。

— 医師がトップダウンで指示するかたちではなくて、全員経営。それぞれのチームの経営・運営はその職員が考える。

医療・看護資格者だけでなく、「ジムッコ」と呼んでいる職員も同じです。グループの2カ所のクリニック・訪問看護の事務をオンラインで支えるだけでなく、医師に同行訪問して、患者や家族と医療者をつなぐ役割を積極的に果たしてくれています。医薬品や材料の管理も任せています。資格がないとできないこと以外に領域を広げてくれていて、医療職が本来の仕事に専念できるよう頑張っており、働きがいのある楽しい場所をつくと自然と人は育ちます。

例えば、子ども3人を抱え49歳で就職し、医療事務を学ぶところから始め、59歳で准看護師の資格を取得して看護師になった人もいます。今、彼女はグループの「NPO法人とものむら」の理事長で、2018年にここから車で約10分の距離の下宿屋だった大きな住宅を購入し、「ささえるさんの家」としてシェアハウスやシェアオフィスとして運用

しながら、農業も始めました。農場の管理人になりたいというのも、亡くなった村上さんの夢で、それを受け継いだかたちです。

— ささえるクリニックは最大で3カ所ありましたが、今は2カ所。拡大は考えていないのでしょうか。

互譲互助の精神で人が育つ場所をつくるのが目的ですから、それぞれの事業所が赤字でなければよい。出ていって独立するのも歓迎です。最近、ケアマネジャーが一人独立しましたが、事務所は「ささえるさんの家」のシェアオフィス。ずっと仲間です。

ここでやっていることは、半径5mのハッピー運動です。1mだと自分と家族だけになってしまいましたが、5mだと近所の人も入ってきてちょっとややこしい。半径5mのハッピーの輪が広がって、つながればコミュニティ全体がハッピーになる。自分が全部やらなくていい。チェーン展開で数を増やすだけの在宅医療が楽しいのかと思います。

資本主義は拡大が宿命ですが、行き止まりも見えてきていて、持続可能性が問われています。大きく儲けなくてもつぶれなければいい、楽しくやればいいというのは、ポスト資本主義の一つのあり方です。自己中心的にならず、互譲互助の精神で、目の前の人たちのために、ちょっと我慢して、楽しくてちょっと汗をかき働く。無理なくできるけど、満足度が高い。半径5mのハッピーの輪が全国に広がって、社会のありようを変えていく。それが夢です。

(2023年8月23日取材)

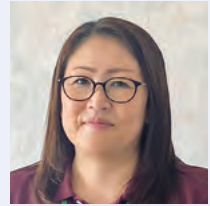


「ささえるクリニック岩見沢」と永森さん。



「ささえるさんの家」には全国からの訪問者の寄せ書きがある。

第2回選考委員特別賞「きみえさんちものがたり」執筆者に聞く



居宅介護支援ささえるさん
所長・主任介護支援専門員
三上 薫さん

出会いは不思議なものです。夕張市立総合病院に就職したものの2年ぐらいで閉鎖。町を出る人もいましたが私は病院から転換した老健に就職し、そこを退職したタイミングで、定期巡回随時対応型訪問介護を始めるからと声をかけていただきました。作文に書いたきみえさんのお宅は実家の隣で、家族ぐるみでお付き合いがあって顔馴染みで会話に詰まることがないので、その点はやりやすかったです。亡くなった後で、自宅を使ってほしいと申し出があった時は、自分たちの仕事を評価をしていただいたことがとても嬉しかったです。

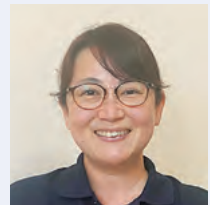
定期巡回は最初のうちは順調で、1日何回もオムツ交換が必要な方や、老老介護でどちらかに認知症があって夫婦二人では心配なので、遠くに住むご家族が心配し、頻回に入れるサービスがありきたいというお声もありました。きみえさんのお宅のように、訪問診療・看護が入っていて、お看取りが近くなってヘルパーが入るといったケースもありましたが、町のケアマネさんで初めてのサービスなので消極的で利用が伸びなくなりました。細長い町なので行ったり来たりしていると、一日の移動距離が100kmぐらいにはなってしまうなど地域性に難しさもありました。ご本人の希望通りに何度も訪問するのではなく、アセスメントで必要性を見極めなさいとよく言われていましたが、黒字化できずに1年余りで閉鎖になりました。

主人も夕張出身の幼馴染でずっと夕張だったので、山を降りて働くなんて考えてもいませんでした。岩見沢では最初は横の関係をつくっていくのに時間がかかりましたが、やりがいを持って仕事をしています。



エピソードは
こちら

第3回選考委員特別賞「むらかみさんでささえたい」執筆者に聞く



訪問看護ステーション
むらかみさん 所長
山崎 緋沙子さん

旭川市神楽岡の村上内科小児科医院は、私の小さい頃のかかりつけで、小中学校は毎日前を通って通学していました。資格をとって、旭川市に戻ってきた時に偶然求人を見つけて。最初は3カ月のパートのつもりだったんですが、働き始めてみると、地域の高齢化が進んでいなんとかお手伝いしたいと思っていたので、永森先生から「訪問看護をやってみないか」とメールをいただいた時は即決。同じ思いを持ってくれた幼馴染を誘って訪問看護ステーションを立ち上げました。幹雄先生(注・村上智彦さんの父親)はあまり賛成ではなかったのですが、受賞した作文を読んで思いを理解してくださり、その後はずっと良き理解者になってくれました。80歳を過ぎても夜中に往診に駆けつけてくださるなど、皆のヒーローでした。「お宅を間違えてピンポンして中に上がり込んでしまったよ」との連絡があったことも(笑)。昼夜問わず、幹雄先生のそばで働けたことはいい経験になりました。昨年90歳で亡くなりましたが、今作文を書くとしたら幹雄先生の楽しいところを残したいです。診療所も閉鎖になっているので「むらかみさん」という名前をいただいて本当に良かったです。なお、智彦先生の息子さんが准看護師になって、正看護師を目指して看護学校に通いながら働いているので、むらかみさんは、むらかみさんですね。

当時はまだ訪問看護や管理者としての経験が浅く、先生方には自分たちで考えて働いて決めろと言われて大変でしたが、よく相談にのってくれたので助かりました。担当を決めずにチームでみるというやり方で、今は70人ほどの利用者をスタッフ5人でみえています。SNSで毎日写真を共有していて、チームワークは抜群です。担当制ではないので休みが取りやすく全員が有給休暇を消化でき、働きやすい職場になっていると思います。



エピソードは
こちら

看護・介護エピソードコンテスト
表彰受賞事業所を訪ねて ②

石川県 小松市

ややのいえ

人としての出会いが ケアも地域も変える 念願のホームホスピスを開設

2017年、第3回の大賞を受賞した「ほがらかに楽しくおらせてくれやの」の舞台になったコミュニティスペース「ややのいえ」は、2022年9月に北陸初のホームホスピス「もう一つの家ややさん」に生まれ変わった。ややのいえ代表の榊原千秋さんの「とことん当事者」目線はいまも変わらず、人として出会うところからの地域づくりも広がっていた。



ややのいえ代表
榊原 千秋さん

—「ややのいえ」は、コミュニティスペースから ホームホスピスになったのですね。

ずっとホームホスピスにしたかったのですが、古い民家なのでスプリンクラーや耐震補強にもお金がかかるので諦めていました。2021年に日本財団で「もう一つの家プロジェクト」が始まり、チャレンジしたら採択されました。コロナ禍の真っ最中で建築資材が高騰し、予算の1.5倍になり、急遽、クラウドファンディングをしてしのぎました。全国の皆様からご支援をいただき、今があります。感謝の気持ちでいっぱいです。

大賞を受賞した「ほがらかに楽しくおらせてくれやの」は、「ややのいえ」を始めたばかりの頃のエピソードで、作者の松村さん（現姓洞庭さん）は、理学療法士で訪問看護ステーションの立ち上げの準備に加わって来ていました（現在は退職）。私は30代の時に交通事故にあって、死にかけて3カ月入院して患者のつらさを味わいました。そんな中、一人のALSの方と出会い、その方の願い事を叶える活動を始めて旅行に行ったり、コンサートを企画したりして、いろいろな方と出会いました。松村さんはそこに参加していたメンバーの一人です。

作文に出てくる正子ばあちゃんは、夫の母で私は三男の嫁。骨折で入院したタイミングで、義母の家族の出産や事故があって同居していた家族が面倒をみられなくなったので、とりあえず老健に移ったら見捨てられたように感じたのでしょね。弱ってしまって。夫が「このまま（義母を）放っておいていいか」と背中を押してくれたので、「ややのいえ」で一緒に暮らすことにし、1年以上家に帰らずに介護しました。大好きなばあちゃんだったからできたんでしょうね。3人子どもを抱えて働いていた30代の頃、庭にドウダンツツジを植えてくれて、「この木が大きくなる頃には（子育てもすんで）楽になつとるよ」と言ってくれた時のことは今も忘れられません。

「ややのいえ」では、病気になっても、認知症でもその人が大切にしていることがあって、それをお聞きしてケアをしていくことを大切にしています。正子ばあちゃんが亡くなったとき、夫は「『ややのいえ』にいる最後の1年半が一番楽しそうやった」と言ってくれました。専門職は、患者や要介護者として出会うと、どうしてもケアする人になってしまうのですが、「人」として会うとパートナーになる。「や

ややのいえ

エピソードは
こちら 

NPO 法人ホームホスピス
こまつ、88Labo（合同会社
プラスぼぼぼ、うんこ
文化センターおまかせうん
ちっち）。また、榊原さん
は一般社団法人日本うんこ
文化学会の発起人で代表
理事を務める。



「ややのいえ」のシンボルはフタ。



皆が集える「とんとんひろば」。

やのいえ」では、子ども・お年寄りも、病や障がいがあっても、ひとりの「人」として出会い、過ごしていただける場をつくることを目指してきました。

—— 地域の人材育成も続けていますね。

地域で保健師をしていましたが、40歳で大学院に入学して学び直しました。大学の教員になりましたが、博士論文で研究したことをアウトプットしたくて思い切って起業しました。根拠のある排便ケアの普及と人材育成がしかなかったのです。排便ケアは人間の尊厳に一番深くかかわる課題です。現場で当たり前のようにやっている排便ケアに何のエビデンスもないことが分かりました。

大学を辞める時に、県の高度・専門医療人材養成支援事業に応募したら通りました。そのアクションプランの発表会で、「認知症ケアに大切な排泄ケアや聞き書きも学んでとことん当事者の視点でまちづくりのできる人を育成したい」と語り合いました。それが今の認知症ケアコミュニティマスター養成で、小松市の委託事業ですと続いています。

仕事で会うと、どうしてもどこそこ病院の誰々さん、地域包括の誰々さんになってしまいます。研修中は、ずっと肩書はなしで“あだ名”で呼び合ってもらっています。そうすると、働く場所が変わったり、定年になって仕事をやめたりしても関係性は変わらず続きます。そういうつながりがようやく小松にできてきたので、これからが楽しみです。余談ですが、県の助成金をもらおうと頑張ったのは、オレンジクロス®の地域包括ケアステーション実証開発プロジェクト※に参



ホームホスピス「もう一つの家ややさん」は、民家を活用している。

加する資金を獲得したかったからです。認知症ケアコミュニティマスターがあるのはオレンジクロスさんのおかげです。実証開発プロジェクトに参加したことで、地域の関係者とのつな



排便ケアの教育もできるようにと、誰でも気持ちよく排便できるようこだわったトイレ

がり広がりが広がり、全国にも仲間ができて、今でも交流が続いています。人生は「誰に会おうか」だと思います。

※ <https://www.orangecross.or.jp/project/carestation/index.php> 参照

—— ケアも地域づくりも人として出会うことが大事なのですね。排便ケアはこの10年で改善されたと思いますか。

施設や病院では下剤で出すのがまだ当たり前で、下痢便がもれないように防水シートで腰をぐるぐるまきしている実態があります。まだまだ改善の余地が大きい。排便のメカニズムと排便ケアのアセスメント方法を学び適切なケア方法を選択するという考え方を当たり前にしたいです。「POO マスター養成研修」も始めて9年になり受講者は700人になりました。大便是体からの「大きなお便り」であり、生活の答え合わせです。体からのメッセージを受け止めて、0歳から100歳まで気持ちよく排便できる暮らし方を育んでいきたい。本気で排便ケアのパラダイムシフトを起こすので、POO マスターになってご一緒にしてください。

(2023年10月11日取材)



ホームホスピス「もう一つの家ややさん」の居室はくつろげる空間に。

看護・介護エピソード
コンテスト大賞受賞者
インタビュー

1

患者さんの人生、自分の仕事が 読みつがれる喜び

第1回大賞受賞者 岡澤 ひとみ さん



—— 記念すべき第1回の大賞でした。

10周年おめでとうございます。賞をもらって、自分の作品に喜んでいただけたことがとても嬉しかったことを覚えています。誰かに勧められて深く考えずに応募しましたが、今もネットで作品が読めますし、自分の生きた証であり、患者さんの人生が単なる記録ではなく、読んでいただいた方の記憶に残っていくような感じがして、作文にしてよかったと改めて思っています。

表彰式のときには、自分で訪問看護を立ち上げたいとお話したのですが、体を壊してしまって療養中です。一度、ターミナルケアにも熱心に取り組んでいるという訪問看護ステーションで働いたのですが、細切れの時間では思っていたような看護はできないと分かり辞めました。

—— がんの末期なのに自宅で過ごすということは、 作文に書かれていた時代にはまだ珍しかったのでは ないかと思います。

あの頃の緩和ケアには、治療の手段がなくなり医師に見放された人がいくところというイメージがありましたね。作品に書かせていただいた方は小さなお子さんをもつお母さんでした。お子さんがまだ小さく、できるだけ普段通りに暮らしたいという強い気持ちを持っていました。痛みが強くなって最後は入院でしたが、それも納得づくでした。

病院で在宅患者のバックアップを行っていたので、在宅で診ていた患者さんと話す機会もあり、これからは家族が暮らしていく家に暗い思い出が残ってしまうから最後は病院と決めたと話された方もいました。それはないと思いますよ、と言ったところ、納得してすぐ自宅に戻られました。その何日か後に亡くなりましたが、ご主人には子どもたちにもいい経験になったと言っていました。ご本人や、ご家族の不安を取り除くことも緩和ケアの一環で、スピリチュアルな部分が一番大切だと私は思っています。正解がないから、一人ひとりに寄り添うしかない。スピリチュアルなケアは人間関係、信頼関係があっ

てこそできるのだと思います。実家が田舎で雑貨屋を営み小さい頃から店番をし、近所の方々がお茶を飲みに来るなどたくさんのお話を学びました。振り返るとそこが私の原点です。

—— 今はどうお過ごしですか。

だんだんできることが減って行って、必要とされなくなることは本当につらいです。病気になって初めて分かることも多く、あの時、あの患者さんは本当はこう思っていたのだろうなと振り返って、これまで出会った100人以上の患者さんに支えられている気持ちです。

緩和ケアは医療現場で完結するのではなく、生活の場である地域でさまざまな社会資源とつながり、チームで行う必要があります。特にこれからはご家族がいない方が増えて、がんの末期であっても一人で闘病する方も増えていくと思われるのでなおさらです。どんな形であれ、お役に立てる活動を続け、緩和ケアの一翼を担えたらと思います。病気になってみて、誰かに必要とされることが生きがいであり、一番の薬と改めて思っています。ボランティアでも何でも社会に役立つことがあればまだまだしていきたい。

私の経験では、看護や介護は燃え尽き症候群と隣り合わせです。介護をされているご家族の方も、これから看護師を目指す方も、相手のことばかりではなく、自分の気持ちや体とも向き合い、いたわりながらケアを続けていってほしいと思っています。

(2023年7月4日取材)

受賞作品「幸せな時間」

余命3カ月で経口摂取もできなくなっていた女性の最後の願いは、2歳と小学校3年生の2人の子どもと普段どおりに自宅で過ごすことだった。疼痛緩和の点滴のあとで、七五三の写真を撮りに行くのを手伝うなど、訪問看護師としての業務を超えて寄り添った。多くの学びと幸せを分けてくれたと振り返り、緩和ケアは、患者と医療職、双方の「学び合い」という。



エピソードは
こちら

看護・介護エピソード
コンテスト大賞受賞者
インタビュー

2

書くことが自身のグリーフケアとなり、 人生の分岐点に

第2回大賞受賞者 川手 弓枝 さん



— 今は大学の教員をなさっているんですね。保健師として就職し、在宅介護支援センターの勤務経験もある。今大学で教えているのは「精神看護」。なぜですか？

これは本当なんです、エピソードコンテストでの受賞が人生の分岐点でした(笑)。介護離職して長年父の介護をしていたのですが、看取った後は後悔ばかり。何かのきっかけですぐ涙が出る、人と会うのが怖い、生きているのがつらい。何もする気が起きず、引きこもり生活をしており、自分はおかしくなったんだと思いました。ようやくパソコンを開けて、今の状態は何だろうとネット検索したとき、本当に偶然エピソードコンテストのことを知りました。締め切りの1週間前だったと思います。そこから3日3晩寝ないで没頭して書いているうちに、救われる気持ちでした。後悔だけでなく、良かったことも思い出してきて。たくさん書いたものを削ぎ落としていったら、頑張っ生きて抜いた父の姿と支えてくれた方々との前向きなエピソードになりました。体験を文章化することが、自身のグリーフケアになっていた、さらに大賞までいただいて、本当に生きていて良かったと思いました。表彰式は東京だったので、電車や高速バスを乗り継いだ遠出は引きこもってから初めて。表彰式への参加が、社会復帰の第一歩になりました。今振り返ると、家族を喪った悲しみが長期間続き、複雑性悲嘆からうつや希死念慮など生活に支障が出ていたんですね。

大学院は在宅看護学に在籍しましたが、グリーフワークがきっかけとなり、精神看護学領域に引き寄せられていきました。受賞後に、地域でグリーフカフェを運営するグループがあると知り、東京から帰ってきた勢いそのまま通うことにしました。大切な存在を亡くした方なら誰でもボランティアスタッフに話を聞いてもらえる、ゆったりとした居場所です。今はインターネットでもいろいろな情報が収集できますが、私の場合は直接的な癒やしも必要でした。人と会うこと(悲嘆の想起)も避けていたので、自分から変わろうと思わない限り、サポー

トグループに繋がれなかった。表彰式の一步から始まった、私なりの認知行動療法だったと思います。大学院での研究は、グリーフケアのサポートグループに関する内容にしました。

今の仕事については、受賞から2年後。父の介護中は自宅で塾をやっていたのですが、お子さんが不登校や発達障害のお母さんたちから相談を受けることが多々ありました。公的な相談窓口はある、でもメンタルな部分を気兼ねなく相談できる所がほしい。自ら相談できれば、こころの健康のセルフケアにつながります。当時はLINE相談の希望も多く、人によってはオンラインを窓口にした方が相談しやすいのかもしれない。

— 教育者として大事にしていることを教えてください。

教員になりたての頃は、「どう行動したらいいか考えて」と学生に課題を投げかければ、間違っていようが答えは返ってきました。最近は失敗を恐れる学生が増え、反応が変化したと感じます。学生の個性を捉え、各自の強みを土台に能力を伸ばしていけるよう考えています。自信を持てる場面が増え、困った場面でSOSも出せるようになります。教員は、学生が伸び伸び力を発揮できる環境の一部であるよう心がけています。父の介護をしていたときにつらかったのは、「あなた保健師なのに、こんなことも分からないの?」という言葉です。資格があろうと学生だろうと、困ったときはつらい。自分の人生が、学生の成長やこころのケアに役立てば幸せです。

(2023年11月13日取材)

受賞作品「地域のつながりが生んだ支援」

病気で重い高次脳機能障害をもった父親を在宅で8年もの間介護した記録。コミュニケーションができない本人のもどかしさをケアスタッフにも知ってもらいたいと、保健師時代に利用者宅で知った「絆の連絡帳」を始めたところ、バラバラだった支援スタッフが一つにまとまり、本人、家族との溝も埋まっていった。在宅介護は地域で生活する中で生まれる絆である、とした。



エピソードは
こちら

看護・介護エピソード
コンテスト大賞受賞者
インタビュー

3

介護は1対1の仕事だから無限の 多様性があり、難しさがある

第6・8回大賞受賞者 中島 圭佑 さん



— 大賞を2回受賞された方は中島さんだけです。
どちらも美し過ぎて作り話みたいなエピソードですね。

施設を退去される時に、ご家族に施設での印象に残った出来事や暮らしぶりをエッセイにして差し上げるということを続けていて、今は50編ほどになっています。短編映画を意識して文章を仕上げているところがありますが、すべて本当にあったことです。大賞をいただいたのは、そのうちの2編です。文盲だった方が必死に文字を覚えて、ご家族に手紙を残した第8回のエピソードは、自分の中でも一番強く残っているエピソードです。

介護は人と人との1対1の仕事だから無限の多様性があり、難しさがある。3食食べて平穩に暮らせればいいという考えの介護職もいますが、その先どう付加価値をつけるか自分次第。「最後の一年メッチャ楽しかったわぁ」と言って死んでもらいたいというのが原点にあります。本当の希望を言ってもらえるだけの関係性をつくるところが一番難しいです。

こういう人と決めつけてじっくり本人の意思や希望を聞くことをしないから三大介護だけで仕事が平坦になってしまう。そういう施設に高齢者が入ってくると、元気だった人もショボンとしてしまう。それを僕は、「巻き込み事故」と呼んでいます。

— 施設に入ると弱ると言われるのは、人災ということですね。どうしたら、巻き込み事故が起きない施設になりますか。

一人だけやり過ぎは困るとか、自分が言われてもそこまでできないから止めてほしいとか、さんざん言われてきました。実は、受賞作品を読んできた経営者からお声がけいただいて、介護付き有料老人ホームに転職しました。だから、前よりも好きなことができる環境にあって、今はピアノがひけるようになりたいという98歳の男性の夢をお手伝いしています。楽譜も読めないけれど、お孫さんがピアノを習っていて連弾したいと。僕も同じレベルなので毎日一緒に練習しています。

僕のいるフロアでは、一人ひとり排尿サイクルを調べて、

トイレ誘導するところから始めました。朝ご飯も無理やり起こして食べさせるのはやめて、メニューの選択肢を増やしてもらい、そうやって一人ひとりのニーズを把握して行って、24時間のタイムスケジュールをシートに落とし込みました。排泄や入浴など身体的なスケジュールと、楽しみの活動など心理的なスケジュールの2種類で、毎日違います。他の職員は最初面倒くさがっていましたが、個別に介護していくと高齢者がどんどん元気になって自立度も上がっていくので意識が変わってきました。トイレの間隔があいてきたから、1回減らしてみようかとか、ここの手が空くようになったから何をいれようかとか24時間シートをもとに毎日議論しています。

個々人のスケジュールに合わせて人材配置することで無駄が減り、結果的にコストを減らすことにもつながりました。うちのフロアの方が、他のフロアと比べて職員の有休の消化率も圧倒的に高く離職者も減りました。

— 素晴らしい実践ですね。将来の夢はありますか？

エンターテインメントにも興味があるので、介護の映画をつくらしてみたいという思いがあります。よくあるお涙頂戴でも、コメディにふるのでもなく、ありのままの現実の姿を伝えたいです。

(2023年9月6日取材)

受賞作品

第6回大賞 「この世界は儂い、だから美しい」

ガンで回復の見込みがないと診断され、生きる意味を見失い入居した女性との魂の触れ合いのエピソード。世界旅行の夢を叶えようとアメリカ旅行の動画を作成。故郷を訪ねてショートムービーに仕立てた。



エピソードは
こちら

第8回大賞 「体温が伝わる手紙～あなたが残した愛のかたち～」

コロナ禍で面会ができなくなる中、死期が迫った女性が字を教えてほしいと言い出し、職員が応えた。亡くなった後で、出てきた手紙には、家族への思い、人生への感謝がつづられていた。



エピソードは
こちら

オレンジクロス この10年のあゆみ

2014年の発足以来、10年にわたって多岐にわたる活動を行ってきました。その1年ごとのあゆみを、事業年度の区切りである7月～翌年6月ごとに掲載します。

委員会の立ち上げなどをはじめとした「研究開発」、また看護・介護エピソードコンテストやセミナー開催を含む「啓発」に分けて紹介します。

※肩書は当時のものです

「地域医療・看護・介護分野に対して恩返しをし、日本の地域包括ケアシステム構築に貢献したい」との創立者の思いから発足した当財団は、初年度にあたるこの年、将来への「種まき」となる活動に力を入れた。2研究委員会と1事例検討会、1プロジェクトを立ち上げるとともに、啓発で第1回看護・介護エピソードコンテストを開催した。併せて、財団発足の周知や賛助会員の募集に努め、「オレンジクロス講演会」と称し、賛助会員向け事業を開催した。



設立記念式典・パーティー

+ 主な活動

Main activities

研究開発

● 「ソーシャル・コミュニティ・ナーシング (SCN) 機能」の研究

2014年9月、「SCN研究委員会」を組成した。田中滋氏（慶應義塾大学名誉教授等）を委員長とし、東京大学教授、日本看護協会スタッフなど8名で構成され、SCN機能について議論を深めた。さらに地域ごとの違いを調査し、質の差を分析するなど研究内容を深掘りした。

● 「家庭医療・老年医療のあり方」の研究

2014年9月、地域で他サービスとも統合的に機能する基準・体系の策定を狙い、「家庭医療・老年医療研究委員会」を立ち上げた。飯島勝矢氏（東京大学高齢社会総合研究機構准教授・医師）を委員長、辻哲夫氏（東京大学高齢社会総合研究機構特任教授等）にアドバイザーをお願いし、医師や看護師を含む計12名で構成された。STEPⅡにあたる2014年度はテーマ発掘と研究計画の策定を実施した。

● 統合ケアマネジメント事例検討会

国立社会保障・人口問題研究所と地域包括ケアイノベーションフォーラムとの共催で、「統合ケアマネジメント事例検討会」を2014年9月に立ち上げた。事例検討会は、川越雅弘氏（国立社会保障・人口問題研究所社会保障基礎理論研究部長）を座長として、医師・看護師・ケアマネジャーやその他専門職を含む11名で構成された。今年度は4カ月に一度のペースで3回にわたり開催した。

● 地域包括ケアステーション実証開発プロジェクト

12月より、オランダのビュートゾルフ（Buurtzorg）に着目し、「地域包括ケアステーション実証開発プロジェクト」を組成し、2015年2月からは38チームが参加のもと進めた。このプロジェクトでは、地域包括ケアステーションモデルを構築し、サービスの実践を行いながらその評価も行うことを目指した。さらに社会保障制度の進化を狙い、その先端モデルを社会に発信し、政策提言も視野に入れて活動を開始した。

今年度は以下の日程でワークショップを開催した。

3/13 キックオフミーティング（41チーム 88名参加）・4/21～24 第1回ワークショップ（38チーム 76名参加）

5/17～28 オランダビュートゾルフへの派遣調査（財団研究員2名）・6/18 第2回ワークショップ（35チーム 85名参加）

● 第1回看護・介護エピソードコンテストの開催

看護・介護にかかわる方の貢献を称えるため、看護・介護エピソードコンテストを創設した。2014年10月～2015年1月に募集し、初年度で告知が十分でなかったものの、熱意あるさまざまなエピソード12編の応募があった。

大賞作品 幸せな時間（岡澤ひとみさん）

優秀賞作品 幸さんのメッセージ（筒井英子さん）

優秀賞作品 私に気づかせてくれた訪問看護（鈴木ひとみさん）

優秀賞作品 忘れられない介護エピソード（本田涼子さん）

● オレンジクロス講演会の開催

財団として初めて、賛助会員を対象とした事業（講演会）を開催した。

「地域包括ケアシステムの本質と歴史的展望」慶應義塾大学 名誉教授 田中滋氏

啓発

発足2年目にあたる今年度は、研究開発では、前年度に立ち上げた2研究委員会と1事例検討会、1プロジェクトを継続した。また啓発では、財団および財団活動そのものの周知を図るため、「賛助会員向けのセミナー」を始めるとともに、看護・介護エピソードコンテストの表彰式と合わせて、一般向けの公開シンポジウムを開催することとした。さらに3年目に向けて、研究開発にとどまらない活動を行えるよう下地作りにも努めた。



+ 主な活動

Main activities

研究開発

● 「ソーシャル・コミュニティ・ナーシング (SCN) 機能」の研究

2カ月に一度の頻度で開催される委員会において、ソーシャル・コミュニティ・ナーシング (SCN) 機能とは何かについて、SCNの対象者は医療依存度が高く、またSCNは対象者・地域をアセスメントできるナースであるとの仮説を立てたうえで議論を深めた。

● 「家庭医療・老年医療のあり方」の研究

2年目にあたる今年度は研究委員会を9回開催するとともに、訪問診療医5名、訪問看護師5名にインタビューし、データ収集を行った。

● 統合ケアマネジメント事例検討会

事例検討会は、川越雅弘氏 (埼玉県立大学大学院 保健医療福祉学研究科 教授) をファシリテーターとし、医師・有識者を含むメンバーで構成されており、今年度は1カ月に一度の頻度で計11回開催した。統合的なケアの提供を目指して、多様な地域のケアマネジャーから事例提供いただき、各専門職から助言を得ながら進めた。

● 地域包括ケアステーション実証開発プロジェクト

2015年2月に発足した本プロジェクトは、38チーム参加のもと、当初予定通り2016年3月に終了した。同年5月21日には公開成果報告会を開催するとともに、「ビュートゾル現地報告書」をオレンジクロスHPで公開した。

なお本プロジェクトは参加者の要望によりフォロー会が開催されることも決定した。

啓発

● 第2回看護・介護エピソードコンテストの開催

2年目にあたる今年度では、2016年3～4月にかけて募集を行い、36編の応募の中から5作品を表彰した。

大賞作品 地域のつながりが生んだ支援“絆の連絡帳”
—在宅介護ケアスタッフの連携— (川手 弓枝さん)

優秀賞作品 今も心に誓った介護 (大澤 憲夫さん)

優秀賞作品 そばにいてくれたらいいから (稲葉 典子さん)

優秀賞作品 かざぐるま (三島 裕子さん)

選考委員特別賞 きみえさんちものがたり (三上 薫さん)



● 公開シンポジウムの開催

看護・介護エピソードコンテストの表彰式と合わせて、一般向けのシンポジウムを開催することとした。

● 賛助会員セミナーの開催

前年開催の「オレンジクロス講演会」を、賛助会員を対象としたセミナーとして定期的に行うこととした。「在宅ケアの新しい潮流」を統一テーマとして4月～翌年3月に3回企画し、第1回を2016年4月に実施した。

賛助会員向けセミナー第1回「複合的な街づくり On-Lokとは?米国先行事例に学ぶ」

米国 On-Lok から講師2名を招聘 2016年4月26日

研究開発では2研究委員会と1事例検討会、1勉強会を、また啓発では3つの事業を継続して実施した。啓発では広報誌「オレンジクロス」を創刊し、春・夏の年2回をペースとして、2016年7月に創刊号、2017年2月に第2号を発行した。また、従来賛助会員向けのみであったセミナーを「オレンジクロスセミナー」と改称し、一般参加も可とするなど、門戸を広げた。



+ 主な活動

Main activities

研究開発

● 「ソーシャル・コミュニティ・ナーシング (SCN) 機能」の研究

2014年9月に組成した「SCN研究委員会」では、全国で活動する看護職を対象とした調査を核とする「研究計画」を、2017年5月に改めて策定した。地域において、先駆的な活動を行っている看護職(看護師・保健師)を対象としたシャドウイング・ヒアリングを通して、SCN機能の定義・類型化を行い、地域のケアニーズとの関連を検討した。

● 「家庭医療・老年医療のあり方」の研究

2014年9月に発足した「家庭医療・老年医療研究委員会」では、3段階に分けて取り組みを進めており、「STEPⅢ」にあたる2016年度は4回の委員会を開催し、仮説的理論構築と検証を行った。

● 統合ケアマネジメント事例検討会

「国立社会保障・人口問題研究所」および「地域包括ケアイノベーションフォーラム」との共催で組成した「統合ケアマネジメント事例検討会」では、約1カ月に1回の頻度で計8回開催し、利用者事例から理想的な介入を探った。なおこの検討会は2017年4月より当財団主催での実施となり、3カ月に一度開催のペースに変更した。

● 「地域包括ケアシステム」構築に係る実証開発プロジェクト(勉強会)

2016年3月に終了された同プロジェクトのフォロー会を2017年1月に開催し、13チーム24人が参加のうえ、実践事例の発表や意見交換を行った。また、正式な「報告書」を同年3月に発行した。

啓発

● 第3回看護・介護エピソードコンテストの開催

3回目の開催となった今年度は、2017年2～4月募集のもと、30編の応募があった。

大賞作品 ほがらかに楽しくおらせてくれやの(松村 朋枝さん)

優秀賞作品 心の耳・・・心のリズム(新美 寿栄さん)

優秀賞作品 熊本地震が残したもの(谷富 明子さん)

優秀賞作品 地域の一員として物申すばい!

～ホームホスピスが我が家になった三婆物語～(樋口 千恵子さん)

選考委員特別賞 むらかみさんでささえたい(山崎 緋沙子さん)



● 公開シンポジウムの開催

前年度の看護・介護エピソードコンテストの表彰式と合わせてシンポジウムを開催。

● 広報誌の刊行開始

財団事業関係者、学識経験者、首都圏在所の地域包括支援センター、全国の訪問介護事業関連会社などに配布する広報誌を創刊。2016年7月、2017年2月の年2回ペースで制作し、各号約1,500部を配布した。



● 賛助会員セミナーの開催

財団の賛助会員を対象としたセミナーの第2回・第3回を開催したほか、2017年4月からは一般の方々も参加可能な「オレンジクロスセミナー」に改称のうえ実施した。

賛助会員向けセミナー第2回「エビデンスに基づく認知症情報学」

静岡大学大学院総合科学技術研究科教授 竹林洋一氏

賛助会員向けセミナー第3回「現場を繋げる人工知能を活用したデータ駆動型デザイン」

産業技術総合研究所人工知能研究センター首席研究員 西田佳史氏

オレンジクロスセミナー第1回「認知症の介護のエビデンスをつくる認知症情報学」

静岡大学創造科学技術大学院 特任教授 竹林洋一氏



2017年5月には改正介護保険法が成立し、次年度の施行に向けて介護業界では規模の大小にかかわらずさまざまな対応策を検討した。その中で設立4年目を迎えた今年度は、前年度から継続して2研究委員会と1事例検討会、1勉強会に取り組んだ。また啓発では、4事業を継続実施、新たに2事業を実施した。



+ 主な活動

Main activities

研究開発

● 「ソーシャル・コミュニティ・ナーシング (SCN) 機能」の研究

従来のSCN研究委員会を発展させ、今年度は「Social Community Nursing (SCN) の機能に関する研究委員会」を立ち上げた。田中滋氏 (埼玉県立大学理事長等) を委員長に、山本則子 (東京大学医学部教授)・大森純子 (東北大学教授)・堀川尚子 (公益社団法人日本看護協会) の各氏に加えて当財団も委員として参加した。

今年度は「SCNの活動内容/効果の明確化と類型化」を目的として活動し、調査報告書はHPで公開した。また、韓国事情を調査し、報告書を発行した。

● 「家庭医療・老年医療のあり方」の研究

3段階に分けて進めた取り組みの成果を、2017年6月、日本在宅医学会で口演「訪問診療医・訪問看護師に求められている連携と役割機能一両職種間におけるギャップの見える化から在宅医療の円滑化を再考する一」として発表した。

● 統合ケアマネジメント事例検討会

前年度より当財団主催で実施することにしたことに伴い、事例を「月間ケアマネジメント」へ掲載するとともにHPでも公開した。

● 「地域包括ケアシステム」構築に係る実証開発プロジェクト (勉強会)

フォロー会を経て、2017年6月に「住民本位の地域包括ケアのマネジメントに関する連続勉強会」を15名のメンバーで立ち上げた。しかし本テーマの実証実験は自治体の協力が不可欠のため実証開発は断念 (報告書は公表) し、新テーマとして「日本版「社会的処方」のあり方検討事業委員会 (仮称)」を2018年6月に発足させた。

啓発

● 第4回看護・介護エピソードコンテストの開催

2018年2月~5月上旬まで募集し、今回はこれまでと比べ大幅増の132編の応募があった。

大賞作品 もう一人のおばあちゃん (小山 祐加さん)

● 公開シンポジウムの開催

看護・介護エピソードコンテストの表彰式と合わせてシンポジウムを開催。秋山正子氏 (株式会社ケアーズ / 白十字訪問看護ステーション 暮らしの保健室室長 / マギーズ東京センター長) に「つながる・ささえる・つくりだす在宅現場の地域包括ケア」の演題で講演いただいた。講演内容は小冊子にまとめ刊行した。



● 広報誌の刊行

● オレンジクロスセミナーの開催

昨年度より一般参加も可とし、年3回実施した。

オレンジクロスセミナー第2回「人工知能と情報技術による認知症ケアの深化・発展」

静岡大学創造科学技術大学院 特任教授 竹林洋一氏

オレンジクロスセミナー第3回「介護分野における人工知能の可能性一介護の進化を目指して一」

株式会社シーディーアイ 代表取締役社長 岡本茂雄氏

2018年オレンジクロスセミナー第1回「みんなの認知症情報学と安心・安全なまちづくり」

静岡大学創造科学技術大学院 特任教授 竹林洋一氏



● セミナーの共催

一般社団法人 医療介護福祉政策研究フォーラム (虎ノ門フォーラム) と共催で、7月と10月にもセミナーを開催した。

● 地域包括ケア先進事例映像の作成

地域包括ケアについて先進的な事例に取り組む「チーム三茶」(東京都)と「社会福祉法人拓く」(福岡県)の活動についてインタビューした内容を映像化し、HPで公開した。



5年目を迎え、財団運営が軌道に乗りつつある中、研究開発では、新たに、人工知能学に基づいた実証評価研究と、日本版「社会的処方」のあり方検討事業（仮題）と称し実証開発プロジェクトに着手した。また創立5周年公開シンポジウムを開催するとともに、ホームページを充実した。



+ 主な活動

Main activities

研究開発

● 「ソーシャル・コミュニティ・ナーシング（SCN）機能」の研究

今年度はコミュニティそのものに着目し、SCN機能が地域住民に与える影響について広島県F市をフィールドとして検討した。第38回日本看護科学学会学術集会で第1報「活動技法の明確化」、第2報「類型化の試み」と2報に分けて報告した。

● 「家庭医療・老年医療のあり方」の研究

新しい投稿先への投稿準備を進めるとともに、インタビュー結果をテキストデータ化した資料をもとに、訪問診療時における医師と訪問看護師間のコミュニケーションギャップに関する小冊子の作成に着手した。

● 統合ケアマネジメント事例検討会

● 人工知能学に基づく「認知症見立て知」の共学・共創システムの開発と実証評価研究

今年度から、一般社団法人みんなの認知症情報学会・静岡大学と共同で委員会を立ち上げた。同学会では認知症の見立て学習プログラムの開発、同大学では認知症の「見立て知」能力の育成を目指し、人工知能（AI）技術を活用しながらデータベース構築から学習プロセスの評価などを担う。財団では資金一部を負担した。

研究期間を3年とし、今年度はケア従事者の見立て能力育成に重点的に取り組み、ICT技術を活用した遠隔講義システムを開発した。

● 実証開発プロジェクトの展開：日本版「社会的処方」のあり方検討事業（仮題）

2018年6月に研究期間を3年として委員会を立ち上げた。初年度となる今年度は、日本版「社会的処方」の意義・方向性を探るため委員会を7回開催。さらに同年8月には「社会的処方」発祥の地であるイギリスで現地調査を実施・報告書を公表した。

● 第5回看護・介護エピソードコンテストの開催

今回は2019年2～5月に募集し、107編の応募があった。 | 大賞作品 最後の時間（森川 詩歌さん）

● 創立5周年公開シンポジウムの開催

2018年7月20日、TKPガーデンシティPREMIUM京橋で「2040年への展開」をテーマに、69名参加のもと、2部制で看護・介護エピソードコンテストの昨年度受賞者表彰と併せてシンポジウムを開催し、講演内容をHPに公開した。

第1部：介護保険制度創設から地域包括ケアシステムへ
田中滋氏（埼玉県立大学理事長等）基調講演および
西村周三氏（医療経済研究機構所長）とのディスカッション

第2部：地域共生社会への展望
各パネラーの講演およびディスカッション
座長：堀田聡子氏（慶應義塾大学大学院教授）

パネラー：猿渡進平氏（医療法人静光園 白川病院 医療連携室長等）、紅谷浩之氏（オレンジホームケアクリニック代表）、山口美知子氏（東近江三方よし基金事務局）、鴨崎貴泰氏（日本ファンドレイジング協会事務局長）



● 広報誌の刊行

● オレンジクロスセミナーの開催

年3回の頻度で一般の方々も参加できるセミナーを開催した。

オレンジクロスセミナー第2回「AIによる高齢者の自立促進・重症化予防」株式会社シーディーアイ 代表取締役社長 岡本茂雄氏
オレンジクロスセミナー第3回「米国の在宅ケアと先端技術」プロデューサー/ライター 西村由美子氏

2019年オレンジクロスセミナー第1回「介護人材の採用・定着・育成・活用のポイント」社会福祉法人合掌苑 理事長 森一成氏

● ホームページの充実

賛助会員に対しセミナー招待、研究成果の情報提供などを通じて関係強化を図ったことに加え、財団HPの掲載内容を充実させ、研究報告書やシンポジウム講演録などを掲載した。

啓発

事業年度後半にあたる2020年3月から新型コロナウイルス感染症が急拡大し、4月には大都市圏を中心に緊急事態宣言が発表されたため、やむなく財団活動の縮小を余儀なくされた。これ以降、とりわけ啓発活動でリアル開催が難しくなった中、開催方法・内容につき試行錯誤を続けた。また、財団事務局ではテレワーク・時差出勤を導入、各種打ち合わせはオンラインで実施した。



+ 主な活動

Main activities

研究開発

● 「ソーシャル・コミュニティ・ナーシング (SCN) 機能」の研究

3カ年研究の最終年度として、SCNs活動定着要項に着目した研究を行うとともに、報告書を作成した。

● 「家庭医療・老年医療のあり方」の研究

初年度の2014年に立ち上げた「家庭医療・老年医療研究委員会」で行った各種インタビューを小冊子にまとめ『シリーズ 在宅ケアを考える①お互いの思いを知ることから始めよう—訪問診療医と訪問看護師の一層の連携に向けて—』を2019年10月に刊行し、財団HPでも公開した。

● 統合ケアマネジメント事例検討会

● 人工知能学に基づく「認知症見立て知」の共学・共創システムの開発と実証評価研究

今年度は昨年度実施の「認知症見立て塾」を終了した方々を対象に、学習内容を高度化した「アドバンスコース」を新たに実施した。当初は6回予定だったが新型コロナウイルス感染症の流行などを受け、4回に減少したものの各回12~16人参加があった。精神科医の診療ロジックを理解しつつ、医師が必要としている情報を収集するために必要な専門知識の習得を目指した。また遠隔システムによる「講師養成プログラム」を18回実施し、計127人に参加いただいた。

● 実証開発プロジェクトの展開：日本版「社会的処方」のあり方検討事業（仮題）

今年度は4月に3つの研究事業の研究助成金申請を行うとともに、8月に報告書を公表した。

- ①令和2年度老人保健健康増進等事業「社会的リスクを抱える高齢者の支援体制に関する研究」に応募した（不採択）。
- ②リンクワーカーの研修プログラムの作成・実践のため、在宅医療助成 勇美記念財団2020年度（前期）指定公募「課題解決型実証研究」に、「地域包括ケア・地域共生社会に対応したリンクワーカー養成の試行と評価」をテーマに応募した（採択）。
- ③三重県が名張市に委託した「地域資源コーディネート機能強化事業」への参加（事業は9月開始）。

● 第6回看護・介護エピソードコンテストの開催

今年度は2020年2~5月に募集し、過去最高の145編の応募があった。なお例年はシンポジウムと表彰式を同時開催していたが、新型コロナウイルス感染症の影響により表彰式は中止し、HPでの公表のみとした。

大賞作品 この世界は儂い、だから美しい（中島 圭佑さん）

● 公開シンポジウムの開催

2019年7月19日、TKPガーデンシティPREMIUM京橋で「医療だけで健康は創れるのか—『社会的処方』の活動を手がかりに、生老病死を住民の手に取り戻そう—」をテーマとしたシンポジウムを、昨年度の看護・介護エピソードコンテスト表彰式とともに開催した。

座長：堀田聰子氏（慶應義塾大学大学院 健康マネジメント研究科 教授）
 後藤励氏（慶應義塾大学大学院 経営管理研究科 准教授）
 近藤尚己氏（東京大学大学院 医学系研究科健康教育・社会学分野 准教授）
 澤登久雄氏（社会医療法人財団 仁医会 牧田総合病院 地域ささえあいセンター センター長）
 長嶺由衣子氏（東京医科歯科大学 医学部附属病院 総合診療科 特任助教）
 三上はつせ氏（医療法人社団 つくし会 新田クリニック 看護師長）



啓発

● 広報誌の刊行

● オレンジクロスセミナーの開催

今年度も開催したものの、2020年4月は新型コロナウイルス感染症のため中止したが、以降はオンラインで開催した。

- 第2回「介護分野の先端技術事情」国立研究開発法人 産業技術総合研究所 招聘研究員 岡本茂雄氏
- 第3回「急速に進化するケアテック」プロデューサー/ライター 西村由美子氏

昨年度に続くコロナ禍の中、研究開発はオンライン活用にて継続したものの、縮小せざるを得なかった。一方、啓発はオンラインなどもフル活用し、米国コロナ最新事情の情報提供などに取り組んだ。また広報誌ではさまざまな専門家の方々に特別寄稿をいただくなど、コロナ禍においてもできる限りの情報提供に努めた。



+ 主な活動

Main activities

研究開発

● 統合ケアマネジメント事例検討会

コロナ禍により医療現場の負担が増えたことから、今年度は10月、12月、2021年2月の3回のオンライン実施に留めた。また過去実施の事例検討について後日発表できるよう、ポイントをまとめる作業を進めた。

● 人工知能学に基づく「認知症見立て知」の共学・共創システムの開発と実証評価研究

今年度は学習の内容を高度化した「アドバンスコース」を6回実施し、毎回15～24人の参加があった。昨年度の学びをもとに、参加者から寄せられた具体的な事例を活用した「見立て塾」の実践や、要因と症状の関係マップを作成し対策法を考える「シナリオ検討」を通して、今までに習得した診療ロジックや知識の活用を目指した。

さらに、本プロジェクト参加者が講師となれることを目指した「講師養成プログラム」を、3月から計8回、リモートで実施した。4月には、2018年度からの研究成果をまとめた報告書を公表した。

● 「社会的処方白書」の発刊

実証開発プロジェクトの一環として2021年2月に「社会的処方白書」を発刊し、HPでも公開した。2018年度の研究成果（含む、英国出張）を踏まえ、社会的処方の概念整理、各種事例の紹介などを掲載している。



啓発

● 第7回看護・介護エピソードコンテストの開催

2021年2～5月に募集した今回は、132編の応募があった。受賞作品は広報誌で紹介したほかHPでも一覧を掲載した。

大賞作品 「つなぐ」を強く、笑顔のために (小松崎 潤さん)

● 公開シンポジウムをオンラインで開催

コロナ禍ということもあり、2021年5月19日にオンライン開催し、広報誌に要旨を掲載した。

「COVID-19で浮き彫りに「ケアするプロの働きがいと悩み」—米国の取り組み—

メディカルジャーナリスト 西村由美子氏・Caring Accent主宰 近本洋介氏



● 広報誌の刊行

今年度はコロナ禍ということもあり誌面での有益な情報伝達に努め、さまざまな立場の専門家の方に寄稿いただいた。

● オレンジクロスセミナーの開催

今年度はオンラインのみで2回、12月と2021年4月に開催した。

「ポスト・コロナの医療・介護」

メディカルジャーナリスト 西村由美子氏

「科学的な介護、自立支援介護の実現のための最新研究」

国立研究開発法人 産業技術総合研究所 招聘研究員 岡本茂雄氏



コロナ禍が続き、全国各地で介護施設内での集団感染（クラスター発生）が報じられるなど、医療・看護・介護現場では対策に腐心した。財団でもさまざまな活動が制限されたものの、オンラインにて活動を継続した。また昨年に続き広報誌では専門家の方々に寄稿いただき、有益な情報を提供できるよう工夫した。



+ 主な活動

Main activities

研究開発

● 統合ケアマネジメント事例検討会

今年度はコロナ禍ということもあり年4回、Zoomによるオンライン開催で事例を検討した。

● 人工知能学に基づく「認知症見立て知」の共学・共創システムの開発と実証評価研究

2021年度は、基本コースを9~12月に、隔週で全6回開催し、30人前後の参加があった。インストラクター育成プログラムを新たに取り入れ、オンラインでも学習者がより協調して学べる仕組みづくりに挑んだ。その結果、事前の学習データや教材へのアクセスログ、見立て塾内のグループワークの対話データや個人検討シートなどの情報の収集が容易となり、より学習内容が分析しやすくなった。

また学習の内容を高度化したアドバンスコースも開催。3回にわたる試行後、新プログラム「ケース創作」を実施し、11~翌年4月に全8回開いた。普段の経験と見立て知を結びつけて、与えられたテーマに応じて実際に起こりうるケースを見立てて、その解決策を探るもので、ケース創作と従来の見立てとを組み合わせることで見立てスキルのさらなる高度化を図っている。

さらに広報誌で静岡大学石川翔吾助教によるレポートを紹介した。

● 日本版「社会的処方」のあり方検討事業（仮題）

コロナ禍の影響で研究は進まなかったものの、当初計画にはなかった三重県「地域資源コーディネーター機能強化事業（モデル地域：名張市）」の一部運営を行った。

● 「コンパッションに満ちたまち」検討事業

今年度から、実証開発プロジェクトの一環として取り組んだ事業で、研究会を立ち上げ、新型コロナウイルス感染症×介護を手がかりに、フィールドワーク及び介護職員等の語りの蓄積を目的として、2年間の計画でスタートした。また、研究会は慶應義塾大学大学院教授・堀田聰子氏を世話人として4回開催した。

並行して、新型コロナウイルス感染症が介護・高齢者支援及び地域社会に及ぼした影響を探るため、2020年夏に複数のクラスターが発生した特別養護老人ホームのケースをモデルに、フィールドワークを実施した。

● 雰囲気、気持ちなどの影響の定量化研究 —介護ベンダー新指標策定—

実証開発プロジェクトの展開の一環で、介護ベンダーの新しい指標策定の実証研究を始めるため、8人からなる検討企画委員会を立ち上げた。当財団理事の岡本茂雄氏を座長とし、ADLの改善に、「雰囲気」や「スタッフの気持ち」といった新たな指標がどのように影響するか分析した。

● 第8回看護・介護エピソードコンテストの開催

2022年2~5月に募集し、105編の応募があった。 | 大賞作品 体温が伝わる手紙~あなたが残した愛のかたち~(中島 圭佑さん)

● 公開シンポジウムをオンラインで開催

コロナ禍の状況下、オンラインでの公開シンポジウムを日本家族看護学会と共催で10月3日に行った。また概要は広報誌に掲載した。

「新たな看護実践の枠組みを創る—SCNs (Social Community Nurses) による看護実践—」

座長：井上玲子氏 (東海大学)

演者：児玉久仁子氏 (東京慈恵会医科大学)、大田章子氏 (脳神経センター大田記念病院 福山脳血管医学研究所)、

中山法子氏 (糖尿病ケアサポートオフィス)、中村順子氏 (秋田大学大学院 医学系研究科)、川添高志氏 (ケアプロ株式会社)

指定発言：田中滋氏 (埼玉県立大学理事長 / 慶應義塾大学名誉教授)



● 広報誌の刊行

● オレンジクロスセミナーの開催

今年度もオンラインでの開催とし、12月と2022年4月の2回実施した。また要旨は広報誌で紹介した。

「介護現場の働き方改革~人材不足への対応~」千葉大学医学部附属病院 特任教授 小林美亜氏

「米国流ニュー・ノーマル ポスト・コロナの暮らし・健康・医療・介護」メディカルジャーナリスト 西村由美子氏

啓発

2022年もコロナ禍が続いたものの、さまざまな行動の条件緩和が行われ、人の往来も回復傾向にあった。研究開発では、日本版「社会的処方あり方」検討事業（仮題）の一環として、初めて自治体事業の事務局運営を受託した。また、今年度から「理事長賞」を新設して表彰内容を充実することで、看護・介護エピソードコンテストのさらなる普及を図った。



+ 主な活動

Main activities

研究開発

● 統合ケアマネジメント事例検討会

今年度もオンラインを主体として、2カ月ごとにZoomで開催した。

● 人工知能学に基づく「認知症見立て知」の共学・共創システムの開発と実証評価研究

今年度は以下の3つの観点から研究を進めた。

① 見立てコーパス*の構築

ケースや見立てた結果、会話のデータを統合して整理し、コーパス化を進めた。

※コーパス…書籍等の内容や、文字化した話し言葉を大量に集め、検索・分析して調べられるようにしたデータベースのこと

② 協調学習環境の構築

これまでの学習状況と知識獲得の関連を評価した研究成果をもとに、AIも活用しながら個別介入の仕組みの実現を目指した。

③ 学習効果の評価

実現した見立て塾の学習環境が、見立ての実践に役に立っているのか評価した。

● 日本版「社会的処方あり方」検討事業（仮題）

「令和4年度名張市地域資源コーディネート機能強化事業」の一部事務局運営を受託した。

● 「コンパッションに満ちたまち」検討事業

昨年度に立ち上げた事業で、最終年となる今年度は、新型コロナウイルス感染症×介護をテーマに、クラスターが発生した特別養護老人ホームなどの具体的なケースをもとにフィールドワークを行い、内容を分析した。

啓発

● 第9回看護・介護エピソードコンテストの開催

2023年2～4月に募集し、過去最多となる260編の応募があった。また、今回より理事長賞（25編）を新設した。

大賞作品 偶然とコトバ（脇本 優佳さん）

● 公開シンポジウムをオンラインで開催

今年度もオンラインで、7月15日に公開シンポジウムを開催した。

「弱さのちからが生み出すつながりーコンパッションにささえられるまちを考えるー」

座長 堀田聡子氏（慶應義塾大学大学院教授）

基調講演 竹之内裕文氏（静岡大学教授）

パネリスト 土畠智幸氏（医療法人稲生会理事長、医師）、中迎聡子氏（株式会社いろ葉代表取締役）、

中村路子氏（まちびと会社 visionAreal 共同代表、一般社団法人 umau. 副代表）、

澤田智洋氏（一般社団法人世界ゆるるスポーツ協会 代表理事）

● 広報誌の刊行

● オレンジクロスセミナーの開催

今年度もオンラインで、10月と2023年3月の2回開催した。また要旨は広報誌で紹介した。

「制度サービスでWell-beingはつukれない」東京家政大学 教授 松岡洋子氏

「経験の拡張によるケア教育DXの可能性」静岡大学 講師 石川翔吾氏・山梨大学 特任教授 小林美亜氏



2023年5月に、新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行したことに伴い、各種社会活動もコロナ前に戻りつつあるなか、財団設立10年目を迎える。財団は、引き続きオンラインを最大限活用して各種事業を継続した。研究開発では、前年度に引き続き自治体事業の一部事務局運営を受託した。啓発では、10周年記念誌の作成に着手した。



+ 主な活動

Main activities

研究開発

● 統合ケアマネジメント事例検討会

今年度もオンラインにより11月、3月に開催した。

● 認知症のある人との心理的対等性実現のためのXR技術を活用したPX体験学習システムの開発と実証評価研究

①メタバースを活用したPX体験:現在、加賀市を中心に2度体験会を実施

その効果について現在論文を準備中。メタバースシステムのコンテンツを拡充する仕組みが完成。

②没入型映像を体験しながら、体験者の生体反応を計測する研究

現在実験中。2024年2月末に千葉で一般向けに体験会を実施し、データを取得した。

③VRと視線情報を統合した研究

● 日本版「社会的処方」のあり方検討事業(仮題)

①社会的処方ネットワークのプラットフォーム整備事業、リンクワーカー養成研修にかかる事業局運営を三重県保険者協議会から受託した。

②社会的処方に参加した研究者の意見を掲載した小論のとりまとめに着手した。

● 「コンパッションに満ちたまち」検討事業

①フィールドワークと当事者の語りの蓄積・分析

新型コロナウイルス感染症×ケアを手がかりにした取り組みの分析を継続した。

- ・グループ内の事業所におけるクラスター発生、他事業所及び他法人への応援を経験した職員が在籍する医療福祉グループにおいて、経験の振り返りにかかわるテキストデータの分析・意見交換を行った。

- ・2020年4月にクラスター発生を経験した老人保健施設において、継続的に実施した職員インタビューのデータの分析・意見交換を行った。

②国内外のCompassionate Communitiesの展開についての調査研究

- ・国内外の事例収集及び現地調査(札幌・大崎(宮城県)・軽井沢・福井・福岡・ケララ(インド)等)を実施した。

- ・ケララで入手した教材「A Workbook for Carers」を翻訳した。

● 第10回看護・介護エピソードコンテストの開催

今年度から募集時期を若干前倒し、2023年12月~2024年3月にかけて募集した。応募数は205編を数えた。

| 大賞作品 母と紡ぐ心の絵本(天竹 勉さん)

● 公開シンポジウムの開催

7月13日、CC研究報告の一環として「コンパッションに支えられるまちを考える」をテーマにオンラインにより開催した。

● 広報誌の刊行

● オレンジクロスセミナーの開催

10月27日、「WHO健康都市とコンパッションコミュニティの台頭~パブリックヘルスに求められる今後の変革~」をテーマに、米国バーモント大学臨床教授アラン・ケレハー氏を招き、日本医療政策機構と共催でセミナーを開催した。

● 10周年記念誌の作成



啓発

報告書一覧

タイトル	表紙	発行年月	報告書はこちら
地域包括ケアステーション 実証開発プロジェクト 報告書		2017年3月	
ビュートゾルフ現地調査報告 ※正式タイトル： 地域包括ケアステーション実証開発プロジェクト 報告書 別冊2 ビュートゾルフ現地調査報告		2017年3月	
韓国におけるSCN機能に関する調査報告書 ※正式タイトル： 平成29年度Social Community Nursing (SCN) 機能に関する研究委員会 2. 韓国におけるSCN機能に関する調査報告書 — Health Care Center (ヘルスケアヘルスケアセンター) 視察報告— 【韓国 ハナン市】視察者：山本則子、野口麻衣子、稲垣安沙		2018年3月	
住民本位の地域包括ケアのマネジメントに関する 連続勉強会 報告書		2018年3月	
平成29年度Social Community Nursing (SCN) 機能に 関する研究委員会 研究報告書 (概要版)		2018年6月	
Social Community Nursing (SCN) 機能を 発揮する基盤形成プロセスの明確化と SCN機能を発揮している看護職による地域活動が 地域住民へ与える影響の検討 報告書		2019年6月	
英国社会的処方現地調査報告書 ※正式タイトル： 日本版「社会的処方」のあり方検討事業 (仮題) 英国社会的処方 ^{注)} 現地調査報告書 注) 本報告書では英国の Social Prescribing を社会的処方と直訳する		2019年7月	

LIST OF REPORTS

タイトル	表紙	発行年月	報告書はこちら
日本版「社会的処方」のあり方検討事業委員会 報告書		2019年8月	
小冊子 在宅ケアを考える ※正式タイトル： シリーズ 在宅ケアを考える① お互いの思いを知ることから始めよう ー訪問診療医と訪問看護師の一層の連携に向けてー		2019年10月	
Social Community Nursing機能の 定着要件の探求 報告書		2020年6月	
社会的処方白書		2021年2月	
人工知能学に基づく「認知症見立て知」の 共学・共創システムの開発と実証評価 報告書 ※共著：みんなの認知症情報学会 静岡大学		2021年4月	
「コンパッションに満ちたまち」検討事業 2023年3月インド視察報告書		2023年8月	
人工知能学に基づく「認知症見立て知」の 共学・共創システムの開発と実証評価 報告書 (2020-2022年度) ※共著：みんなの認知症情報学会 静岡大学		2023年8月	

セミナー・シンポジウム開催実績

セミナー

会議名	開催日時	開催場所
2015年 オレンジクロス講演会	2015.5.28 (木)	東海大学交友会館 (講演会:霞の間 交流会:相模の間)
2016年 第1回賛助会員セミナー	2016.4.26 (火)	TKP東京駅八重洲カンファレンスセンター (ホール5C)
2016年 第2回賛助会員セミナー	2016.9.16 (金) セミナー 15:00~17:00 / 交流会 17:15~18:45	TKP東京駅八重洲カンファレンスセンター (セミナー:ホール7C 交流会:ホール8C)
2016年 第3回賛助会員セミナー	2016.11.8 (火) セミナー 15:00~17:00 / 交流会 17:15~18:45	TKP東京駅八重洲カンファレンスセンター (セミナー:ホール7C 交流会:カンファレンスルーム7F)
2017年 第1回オレンジクロスセミナー	2017.4.21 (金) セミナー 15:00~17:00 / 交流会 17:15~18:45	TKP東京駅八重洲カンファレンスセンター (セミナー:ホール7C 交流会:カンファレンスルーム7F)
2017年 第2回オレンジクロスセミナー	2017.9.22 (金) 15:00~17:00	TKP東京駅八重洲カンファレンスセンター (ホール7C)
2017年 第3回オレンジクロスセミナー	2017.11.17 (金) セミナー 15:00~17:00 / 交流会 17:15~18:45	TKP東京駅八重洲カンファレンスセンター (セミナー:ホール7C 交流会:カンファレンスルーム7F)
2018年 第1回オレンジクロスセミナー	2018.4.20 (金) セミナー15:00~17:00 / 交流会 17:15~	TKP東京駅八重洲カンファレンスセンター (セミナー:カンファレンスルーム4C 交流会:4R)
2018年 第2回オレンジクロスセミナー	2018.9.21 (金) セミナー 15:00~17:00 / 交流会 17:15~18:45	TKP東京駅八重洲カンファレンスセンター (セミナー:カンファレンスルーム9C 交流会:9D)
2018年 第3回オレンジクロスセミナー	2018.11.30 (金) セミナー 15:00~17:00 / 交流会 17:15~18:45	TKP東京駅八重洲カンファレンスセンター (セミナー:カンファレンスルーム4C 交流会:4R)
2019年 第1回オレンジクロスセミナー	2019.4.19 (金) 15:00~17:00	TKP東京駅八重洲カンファレンスセンター (カンファレンスルーム4P)
2019年 第2回オレンジクロスセミナー	2019.9.20 (金) 15:00~17:00	TKP東京駅八重洲カンファレンスセンター (カンファレンスルーム7F)
2019年 第3回オレンジクロスセミナー	2019.11.15 (金) 15:00~17:00	TKP東京駅日本橋カンファレンスセンター (カンファレンスルーム319)
2020年 第1回オレンジクロスセミナー	※新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため中止	
2020年 第2回オレンジクロスセミナー	※新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため中止	
2020年 第3回オレンジクロスセミナー	※新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため中止	
【緊急講演】オレンジクロスセミナー	2020.12.11 (金) 19:00~20:30	オンライン開催 (Zoom)
2021年 第1回オレンジクロスセミナー	2021.4.16 (金) 15:00~17:00	オンライン開催 (Zoom)
2021年 第2回オレンジクロスセミナー	2021.12.10 (金) 15:00~17:00	オンライン開催 (Zoom)
2022年 第1回オレンジクロスセミナー	2022.4.22 (金) 15:00~17:00	オンライン開催 (Zoom)
2022年 第2回オレンジクロスセミナー	2022.10.7 (金) 15:00~17:00	オンライン開催 (Zoom)
2023年 第1回オレンジクロスセミナー	2023.3.24 (金) 15:00~17:00	オンライン開催 (Zoom)
アラン・ケレハー氏 特別セミナー	2023.10.27 (金) 10:00~12:00	Global Business Hub Tokyo (大手町フィナンシャルシティ グランキューブ3階)

PAST EVENTS

演 者 (肩書は当時のものです)	演 題	参加者数 (交流会)
慶應義塾大学 名誉教授 田中 滋氏	地域包括ケアシステムの本質と歴史的展望	12名 (12名)
On-Lok PACE (ベース) パートナーズディレクター Elizabeth R. Carty (エリザベス カーティ) 氏 On-Lok PACE (ベース) パートナーズ最高医療責任者 Jay Luxenberg (ジェイ ルクセンバーグ) 氏	複合的な街づくり On-Lokとは?米国先行事例に学ぶ	48名 (29名)
静岡大学大学院総合科学技術研究科 教授 竹林 洋一氏	エビデンスに基づく認知症情報学 — EBMからEBC (エビデンスベースド・ケア) へ—	21名 (15名)
産業技術総合研究所 人工知能研究センター 首席研究員 西田 佳史氏	現場を繋げる人工知能を活用したデータ駆動型デザイン	22名 (14名)
静岡大学 創造科学技術大学院 「みんなの認知症情報学会」設立準備室 特任教授 竹林 洋一氏	認知症の介護のエビデンスをつくる認知症情報学 — 根拠に基づく認知症のケアの確立を目指して—	23名 (8名)
静岡大学 創造科学技術大学院 「みんなの認知症情報学会」設立準備室 特任教授 竹林 洋一氏	人工知能と情報技術による認知症ケアの深化・発展 — 市民情報学で創る安心安全な高齢社会を目指して—	21名 ※予定していた 交流会は中止
(株) シーディーアイ 代表取締役社長 岡本 茂雄氏	介護分野における人工知能の可能性—介護の進化を目指して—	24名 (11名)
静岡大学 創造科学技術大学院 特任教授 一般社団法人みんなの認知症情報学会 理事長 竹林 洋一氏	みんなの認知症情報学と安心・安全なまちづくり — マルチモーダルAIの研究が未踏高齢社会を拓く—	20名 (9名)
(株) シーディーアイ 代表取締役社長 岡本 茂雄氏	AIによる高齢者の自立促進・重症化予防 — 介護保険財政の健全化に資する—	37名 (14名)
プロデューサー/ライター 西村 由美子氏	米国の在宅ケアと先端技術	33名 (11名)
社会福祉法人 合掌苑 理事長 森 一成氏	介護人材の採用・定着・育成・活用のポイント	19名
国立研究開発法人 産業技術総合研究所 招聘研究員 岡本 茂雄氏	介護分野の先端技術事情	17名
プロデューサー/ライター 西村 由美子氏	急速に進化するケアテック	18名
メディカルジャーナリスト 西村 由美子氏	ポスト・コロナの医療・介護	25名
国立研究開発法人 産業技術総合研究所 招聘研究員 岡本 茂雄氏	科学的な介護、自立支援介護の実現のための最新研究	21名
千葉大学医学部附属病院 特任教授 小林 美亜氏	介護現場の働き方改革 ~人材不足への対応~	21名 ※申込人数
メディカルジャーナリスト 西村 由美子氏	米国流ニュー・ノーマル ポスト・コロナの暮らし・健康・医療・介護	14名 ※申込人数
東京家政大学 教授 松岡 洋子氏	制度サービスでWell-being はつくりえない	23名 ※申込人数
静岡大学 講師 石川 翔吾氏 山梨大学大学院総合研究部医学域 特任教授 小林 美亜氏	経験の拡張によるケア教育DXの可能性	12名
【講演者】米国パーモント大学臨床教授 アラン・ケレハー氏 【ファシリテーター】慶應義塾大学大学院 健康マネジメント研究科 教授 日本医療政策機構 理事 堀田 聡子氏	WHO健康都市とコンパッションコミュニティの台頭 ~パブリックヘルスに求められる今後の変革~	申込 105名 参加 48名

セミナー・シンポジウム開催実績

シンポジウム

会議名	開催日時*	開催場所
第1回オレンジクロスシンポジウム	2015.7.24 (金) 14:00~16:00	トラストシティカンファレンス京橋
第2回オレンジクロスシンポジウム	2016.7.15 (金) 14:30~16:00	トラストシティカンファレンス京橋
第3回オレンジクロスシンポジウム	2017.7.21 (金)	トラストシティカンファレンス京橋
第4回オレンジクロスシンポジウム (財団設立5周年記念)	2018.7.20 (金) 13:00~18:20	TKPガーデンシティPREMIUM京橋
第5回オレンジクロスシンポジウム	2019.7.19 (金) 14:00~17:30	TKPガーデンシティPREMIUM京橋
第6回オレンジクロスシンポジウム	2021.5.19 (水) 19:00~20:30	オンライン開催 (Zoom)
第7回オレンジクロスシンポジウム (主催:日本家族看護学会 第28回学術集会/ (一財) オレンジクロス)	2021.10.3 (日) 10:20~11:50	オンライン開催 (Zoom)
第8回オレンジクロスシンポジウム	2022.7.15 (金) 15:00~18:00	オンライン開催 (Zoom)
第9回オレンジクロスシンポジウム	2023.7.13 (木) 14:30~17:30 (2部制) 第1部 (14:30~15:20) 第2部 (15:30~17:30)	オンライン開催 (Zoom)

※第1回~第5回までは、シンポジウム開催前に看護・介護エピソードコンテスト表彰式を開催

PAST EVENTS

演 者 (肩書は当時のものです)	演 題	参加者数
<p>【座長】医療経済研究機構 所長 西村 周三氏 【演者】暮らしの保健室 室長 秋山 正子氏 国際医療福祉大学大学院 教授 堀田 聡子氏</p>	<p>わが町の玉ねぎを育む! いまなぜ地域包括ケアステーションなのか</p>	<p>約45名 ※申込人数</p>
<p>国立研究開発法人産業技術総合研究所 ロボットイノベーション研究センター 研究センター長 比留川 博久氏</p>	<p>自立支援を目指すロボット介護機器</p>	<p>13名</p>
<p>(株) ケアーズ (白十字訪問看護ステーション)・暮らしの保健室 室長・ マギーズ東京 センター長 秋山 正子氏</p>	<p>つながる・ささえる・つくりだす在宅現場の地域包括ケア</p>	<p>15名</p>
<p>第1部 【座長】医療経済研究機構 所長 西村 周三氏 【演者】埼玉県立大学 理事長/慶應義塾大学 名誉教授 田中 滋氏 第2部 【座長】慶應義塾大学大学院 教授 堀田 聡子氏 【パネラー】認定特定非営利活動法人日本ファンドレイジング協会 事務局長 社会的インパクトセンター長 鴨崎 貴泰氏 医療法人静光園 白川病院 医療連携室長・ 大牟田市 保健福祉部 健康福祉推進室 相談支援包括化推進員 猿渡 進平氏 オレンジホームケアクリニック 代表 紅谷 浩之氏 公益財団法人東近江三方よし基金事務局 山口 美知子氏</p>	<p>【テーマ】2040年への展開 第1部 『介護保険制度創設から地域包括ケアシステムへ』 第2部 『地域共生社会への展望』</p>	<p>69名</p>
<p>【座長】慶應義塾大学大学院 健康マネジメント研究科 教授 堀田 聡子氏 【演者】慶應義塾大学大学院 経営管理研究科 准教授 後藤 励氏 東京大学大学院 医学系研究科健康教育・社会学分野 准教授 近藤 尚己氏 社会医療法人財団 仁医会 牧田総合病院 地域ささえあいセンター センター長 澤登 久雄氏 東京医科歯科大学 医学部附属病院 総合診療科 特任助教 長嶺 由衣子氏 医療法人社団 つくし会 新田クリニック 看護師長 三上 はつせ氏</p>	<p>医療だけで健康は創れるのか —「社会的処方」の活動を手がかりに、 生老病死を住民の手に取り戻そう—</p>	<p>64名</p>
<p>メディカルジャーナリスト 西村 由美子氏 Caring Accent (ケアリング・アクセント) 主宰、PhD, CPXP (Certified Patient Experience Professional: 米国) 近本 洋介氏</p>	<p>COVID-19で浮き彫りに 「ケアするプロの働きがいと悩み」—米国の取り組み—</p>	<p>50名 ※申込人数</p>
<p>【座長】東海大学 井上 玲子氏 脳神経センター大田記念病院 福山脳血管医学研究所 大田 章子氏 糖尿病ケアサポートオフィス 中山 法子氏 秋田大学大学院 医学系研究科 中村 順子氏 ケアプロ (株) 川添 高志氏 東京慈恵会医科大学 児玉 久仁子氏 【指定発言】埼玉県立大学 理事長・慶應義塾大学 名誉教授 田中 滋氏</p>	<p>新たな看護実践の枠組みを創る — SCNs (Social Community Nurses) による 看護実践 —</p>	<p>16名 ※申込人数</p>
<p>【座長 (進行)】慶應義塾大学大学院 教授 堀田 聡子氏 【基調講演】静岡大学 教授 竹之内 裕文氏 【パネリスト】医療法人稲生会 理事長・医師 土畠 智幸氏 (株) いろ葉 代表取締役 中迎 聡子氏 まちびと会社 visionAreal (ビジョナリアル) 共同代表・ 一般社団法人umau. 副代表 中村 路子氏 一般社団法人世界ゆるスポーツ協会 代表理事 澤田 智洋氏</p>	<p>弱さのちからが生み出すつながり —コンパッションにささえられるまちを考える—</p>	<p>50名 ※申込人数</p>
<p>第1部 大阪大学グローバルイニシアティブ機構 講師 島菌 洋介氏 慶應義塾大学大学院 健康マネジメント研究科 教授 堀田 聡子氏 第2部 ほっちのロッヂ 共同代表・福祉環境設計士 藤岡 聡子氏 コミュニティハウスひとのま 代表 宮田 隼氏 認定特定非営利活動法人こまちぶらす 理事長 森 祐美子氏 コミュニティナースカンパニー インターン 池野 優真氏 【進行】藤岡 聡子氏・堀田 聡子氏</p>	<p>【テーマ】コンパッションに支えられるまちを考える 第1部 コロナ禍におけるケアの揺らぎ —クラスター対応をめぐる介護施設職員の語りから— 第2部 生老病死を地域住民の手に取り戻そう —コミュニティでの支え合いに向けたチャレンジ—</p>	<p>92名 ※申込人数</p>

編集後記

財団設立以降、「山椒は小粒でも、ピリリと辛い」をモットーに、小さな財団ながら、少しでも「地域包括ケアシステム構築」の一助になれるよう、日々取り組んでまいりました。早いもので、10周年記念誌を発行するまでになりました。

これもひとえに、いつも温かく見守ってくださっている賛助会員のみなさま、理事会・評議員会で、厳しくも励ましのお言葉をかけていただけた理事・評議員・監事のみなさま、そして何よりも、最先端の研究を担っていただいた研究者のみなさまに、深く感謝申し上げます。

この記念誌では、財団創設者の強い思いで開始しました「介護・看護エピソードコンテスト」の受賞作品を中心に、この10年を振り返ってみました。この小冊子が、少しでも「地域包括ケアシステム」を考えるヒントになれば、望外の喜びです。

改めて、関係各位のこの10年間のご理解・ご協力・ご支援に深く感謝申し上げますとともに、今後とも旧倍のご高配をお願い申し上げ、編集後記とさせていただきます。

10周年記念誌 編集委員

西山 千秋

一般財団法人オレンジクロス 10周年記念誌

2024年7月1日発行

発行 一般財団法人オレンジクロス
〒104-0031 東京都中央区京橋 2-12-11 杉山ビル6F
TEL.03-6228-7216

制作・印刷 株式会社橋本確文堂



一般財団法人

オレンジクロス

